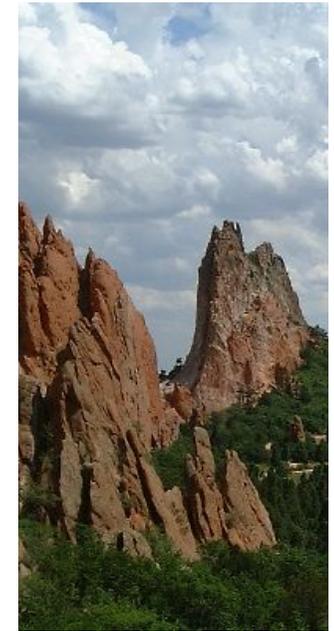


# 園芸療法旅の日記

## —コロラド編—

ヤマニー



人は旅に出て  
自分を取りもどす  
出会い とまどい 冒険 発見

## プロフィール

この旅日誌は、二〇〇一年七月八日から一五日にかけて、アメリカの園芸療法を中心にしたリハビリテーション事情を、等身大で見てまわるスタディツアーの番外記録である。

昨年のツアーが終わったとき、アメリカの園芸療法の現状と問題は、ほぼ把握できたと菅由美子と確認した。アメリカにおける医療・保健・福祉の事情と、作業療法の種目の一つから生まれ、絵画や音楽やレクリエーションなどとともに、補助的療法という形で扱われている園芸療法。そのツアーで、僕は作業療法士として、今後の日本における作業療法と補助的療法の関係に一つの指針を見いだしていた。菅由美子は、どのように日本の中で園芸療法を育てていくかが課題と、帰国後、「人と自然社」という有限会社を立ち上げた。

「あのね、ほほ、ははは、あまりむりしないようにしてくださいね〜、とここで話はかわりますけれど：、ちよつと、これしませんか。ほほ、ははは：：。」。「人と自然社」の立ち上げ話し。それはいいことだねとうなずいたとき、そこはもう管由美子ワールドだった。

人と自然社は「社長は元気で留守がいい。会社は社員のこころの支え、生活の支えは自分で見つける」

「山根センス、働き過ぎだから、コロラドの大自然の中でゆっくり骨休めしませんか。今度はむりをせずに、のんびりと」と菅がいう。「人と自然社」の代表取締役ともなると、社員に対する配慮も粋だねと思って、「いねコロラドか」と聞き流し、忘れてしまっていた。菅は、例年のように、スイスのユング研究所に出かけた。二〇〇〇年十一月のことだ。暮れに一度帰るが、年明けから三月はじめまで、もう一度スイスに行くという。

その留守中のことである。昨年のツアーを組んだ国際治療教育研究所から、菅から聞いていると思うがと電話が入った。コロラドの園芸療法ツアーでアメリカ園芸療法協会の年次大会に出席し、シンポジストとして意見交換をすることになったのでよろしくとのことである。さらに、「グリーン情報」と「総合ケア」から、二〇〇〇年ツアーを元に、連載原稿を出していただけると菅由美子から聞いているのでよろしくという連絡も入ってきた。作業療法白書の調査集計が終わり分析と執筆がはじまるさなかのことである。あとは、蚕が桑の葉を食べるように、ただただ、ひたすら、目の前の仕事を片づける現実だけが残された。

## ツアーメンバーの感想

六月六日、朝の講義を終え研究室に戻り、パソコンに向かってしていると画面が右に流れはじめた。まっすぐ歩けずに倒れてしまう。夕刻まで横になって様子をみるが改善せず、救急外来へ。ああ、なんとという災難。それから一週間あまりは、眩暈のため寝ながらパソコン状態で仕事を片づけた。何とか歩けるようになり、みんなにしかられ、心配されながら、作業療法学会に出席。演題発表と技術講演、精神障害問題緊急集会などを何とかこなす。その最中、追われる者を鞭打つように、腰痛が再発。踏んだり蹴つたりの状態である。天から、休め、休めという声がし、からだがいさりにそれを訴えている。

その間も、ツアー募集は続く。人数割れであるが決行と、菅代表取締役の鶴の一声。昨年に続き通訳兼添乗員の菅とがたがたのからだの僕の監視役にと、菅は一ドル社員キクチャンに同行を求め、総勢九名でツアー決行が決まった。そして、七月に入り、まだ残る腰の痛みをコルセットで固定し出発。今回のスタディツアーの特徴は、質の高いサービスを提供している施設を通して医療・保健・福祉の事情をみるということと、アメリカ園芸療法協会の年次大会に出席し、連携の可能性をみるということにあった。

園芸療法旅日誌コロラド編（スタディツアー番外編）― 目次

プロローグ

成田発ミネアポリス・デンバー

顔合わせ

いつもの始まり

デンバーはミネアポリスか

バイクスピーク

荒野に広がる緑の地上絵

荷物はどこへ

神々の庭

登山電車は山頂へ

最初の晚餐

不運な荷物

受刑者の更正と医療刑務所

三六〇度の地平線

育てることがうれしい

復権への道

医療刑務所

お詫びの日本食

ツアーメンバーの感想

ここまでできるリハビリテーション  
最高水準のリハビリテーション  
医療者の良心  
買い取った車いす会社  
レクリエーション  
だれが利用できるのか？  
アメリカ園芸療法協会レセプション  
忘れられたベッドメイキング  
懐かしい顔  
Dr. ヤマニー  
ナイトセッション  
カップヌードルが食べたい？  
スタディだよ  
シゲルのつっこみ  
オダマリシゲル  
ひとが支える  
癒しのウエルカム  
少し怪しさも  
ウシもエビも

43 41 40 39 36 36 35 35 34 33 31 31 30 29 28 27 27 26 26 25

ツアーメンバーの感想

コロラドステーキを探せ  
丸ごとオマルエビ  
齧歯類のごとく  
ベレー帽スフレ  
アメリカ園芸療法の花と影  
総会はランチで  
評価表はないのよ  
活動と療法  
最後の晚餐  
横に走るイナズマ  
一六番街  
再び齧歯類のごとく  
メンバーの夜は更けて  
ランランシズカの夜歩き  
メンバー発ミネアポリス・成田  
家が動いている  
伊丹空港四三個分  
敵しいチエック  
空港も走るランランシズカ

61 61 60 60 59 58 58 57 56 56 55 52 51 50 49 47 46 45 44

旅の終わり	62
ツアーメンバーの感想	63
自然は大人にとっても子どもにとっても大きな玩具 (吉川記子)	64
2001年 アメリカの旅 (石井忠彦)	67
米国コロラドツアー感想文 (高橋 滋)	74
デンバーミスティリーツアーに参加して (望月晃二)	76
作業療法と園芸療法 米国視察研修で思うこと (金子敦子)	83
作業療法と園芸療法 米国視察研修で思うこと (腰原菊恵)	85

## 成田発ミネアポリス・デンバー（二〇〇一年七月八日空路ミネアポリス経由でデンバーの予定）

今回の旅は、前日までなにの準備もできなかった。いつもの旅の常備薬正露丸も買っていない。作業療法学会、五年に一度の作業療法白書の難航、厚生科学研究報告書、などなど山積みの仕事。目が回るほど忙しいのだから、それ以上抱え込むと腰が砕けるといふ身体のうめきのように、急におきた眩暈と腰痛。そのうめきを聞きながら、洗濯用のパラシュートロープ、ツールナイフ、デジタルカメラをバックに入れる。

七月八日、京都七時五七分発ひかり車内でノリコサマと合流。新幹線と成田エクスプレスを乗り継ぎ空港へ。

## 顔合わせ

新東京国際空港第一ターミナルビル出発ロビー、今回はミネアポリスで一名合流するため、八名がそろろう。リバイ・インターナショナルの小山と馬場から、ツアーの説明を受ける。馬場が一生懸命、首筋に汗をかきながら説明。それをうなずきながら見守る小山、新人教育担当を兼ねているかのようなのである。少ない人数だからと、名前だけの自己紹介。アメリカで資格を取った園芸療法士と大学の先生がついているからと安心されて参加した人もいるだろう。しかし、馬場から手短かにいわれた団長の挨拶は、あまりにも短く、「いろいろおきるでしょうが、自己決定、自己責任で」。はじめてのひとにとっては、ただ不安をかきたてるだけの団長挨拶である。唾然とする参加者、初めてわれらに会う馬場の顔に大丈夫だろうかという心配色が表れる。ベテラン小山は昨年の経験からか、この人たちだものと落ちついたもの。

さて、これから始まる旅に先立ち、メンバーを紹介をしておこう。紹介内容は、旅の間にかいまみたそれぞれの人生の航跡と個性である。

ノリコサマ：吉川記子。父君が旧国鉄管理局にお勤めだったという家柄の出。江戸時代から続く関西の旧家に嫁ぎ、築三五〇年という屋敷に住まい、家とご主人とお子たちに使え、今はボランティアとしてコミュニティガーデンを開き、地域の人に提供している。今回の最年長だったが、その育ちの良さと服装のセンスの良さ、そして日常と伝統から少し開放された行動が、何ともいえないおらかな雰囲気をつアーにもたらした。

イッシー：石井忠彦。終戦の年に生まれる。若くして職を失い、ポン引きや誘われてテキ屋のサクラをしたり、戦後の闇市から育ったような波瀾万丈の生活を送ってきた。天性の人の良さから、飯場生活中にボスに見初められて見合い結婚。視力障害がある奥さんの五感に救われることが多いと語る愛妻家。今、また会社を手放し、最愛の奥さんをベースキャンプに、園芸療法、ランドスケープに道を求め、ロマンとデラシネの旅を続ける。ジャズが好きという背中に、自由人の男の哀愁がただよう。

シゲルまたはオダマリシゲル：高橋 滋。宮崎県の知的障害者更正施設で生活指導主任。時折福祉のプロとしてのキリツとした一面をのぞかせる、少年のような好奇心と情熱をもって熱く語り行動する。今回の旅にあたり、部下がショージュとマヨネーズの小瓶を餞別代わりに渡してくれたという。内気で気遣いの彼も、夜行性なのかあたりが暗くなると饒舌になる。そのおしゃべりが過ぎるときに、われらの監視役キクチャンが、思わず発したオダマリシゲル。

モッチー：望月晃二。心理系学部出身の作業療法士。臨床経験を経て、現在は宮城県にある東北文化学園大学で作業療法の教官をしている。ウサギのようなナイーブな性格とモッチーセンスといわれる生活スタイルをもつ。オダマリシゲルは、表面上自分と対極にみえるモッチーに触発され、ナイトセミナーになるとしきりにモッチーにジャブをかましていた。その単独行動の身の軽さから、「人と自然社」企画いきあたりばつ旅ツアーの先発視察隊長に任命されることになる。

マドンナアツコ：金子敦子。名古屋の精神病院に勤務している経験四年目の作業療法士。作業療法士になる前は外資系の会社でオフィスガール。オレンジ色が似合う、サングラスをかけると正体を現すマフィアの姉御。デンバーの夜、ナンパしてきたヤンキーボーイにキックをみまったりという噂も真実をもつて伝わる。作業療法士になる前の生活がもたらしているのか、経験年数以上のゆつたりとした行動は優雅で、職場の病院では、患者さんたちのマドンナ兼マザー的存在。

ランランシズカ：金子 静。静岡県のリハ病院で働いている経験三年目のフレッシュ作業療法士。このツアーのなかでは最年少。これはと興味をもつとすべてを忘れて夢中になり、目的めざしてランランラン。その自由な振る舞いと率直さに、少し社会適応が過ぎたおじさんやおばさん（いえお姉さん）たちがやきもきしたり、うらやましがったり。いつでもどこでも、ウォーキング、ランニング。旬を生きているランランシズカ。

キクチャン：腰原菊恵。京都大学で作業療法学科の助手をしている作業療法士。「人と自然社」の「ドル社員（注：年間給与一ドルで感謝をもって働く、人と自然社有能社員のこと。ちなみにこの給与はまだ支払われた実績がない）。今回もその年齢不詳な柔らかな落ちつきとどっしり（尻）感が買われ、ユミコ「人と自然社」代表取締役の懇願により、「人と自然社」委託の監視役兼介護役として参加。再びツアーメンバー全員の食事の大蔵省を司る。

ユミコまたはシャチョー：管由美子。このツアーの仕掛け人、園芸療法に関する同行通訳兼添乗員。昨年とは違って、今年は常に経営危機と戦う会社「人と自然社」の代表取締役である。いきあたりばつ旅が得意。アメリカで園芸療法の資格を取り、すでに三度研修ツアーの経験があり、見かけとはうらはらに以外にタフ。見えても見えない、聞こえても聞こえない、天然ババ目、天然ババ耳の持ち主。

ヒロポーあらためてヤマニー：山根 寛。同行解説者という名前をもらいながら、子どものように一人で勝

手に歩き回る、作業療法を趣味にしている作業療法士。「人と自然社」特別無給学術顧問。あてになりそうで危ない行動が、結果的にみんなの自己決定、自己責任を促し、主体性を育てることになる。アメリカ園芸療法協会年次大会の抄録集にプリントミスで yamane が yamami になっていたことから、今回よりヤマニーと呼ばれるようになる。その呆けぶりは、すでにヤマジーもしくはジージヤマの域に達しており、その襲名も間近であろう。

ヤマニーとユミコの KAN・KAN コンビを含めて、総勢九名が今回の旅の一行である。八日間の旅、一行の行く手には、なにが待っているのだろうか。名前以外の自己紹介も無しに、一名（モツチー）は途中から合流というツアーグループが、そのパラレルな集まりから、次第にファミリーへと育っていった旅を、あらためてたどってみることにしよう。

### いつもの始まり

出発時間まで自由時間、一四時にゲート43に集合。何かあったら添乗員兼務のユミコに携帯電話をと、小山が締めくくろうとしたとき、ユミコシヤチヨ

「私、携帯忘れてきたんです。ハハ、ハハ：」

その言葉に、馬場の汗は首筋で凍りついた。一瞬、この人に添乗員を任せて大丈夫なのかというように、小山の視線が宙をさまよう。しかし、さすがベテラン小山、この人たちにとってはいつものことよと自らに言い聞かせるように、たじろぎを瞬時に押さえた。

馬場、小山の心配をよそに、一行は出発ロビーへと向かう。毎度のことながら、ヤマニーは金属探知器につ

かまって身体チェックをされる。

一五時、ノースウエスト航空NW020便は、予定どおりミネアポリスに向けて成田を離陸。空路を一路、ミネアポリス経由でデンバーへ。コロラドスプリングスのホテルで温かなシャワーとナイトキャップが待っているはずの出発であった。

一七時に最初の機内食。チキンのみそ焼き、ライス、カリフラワーのサラダ付き海老のマリネ、稲庭うどん、フルーツコンポーネントにチョコ。メニューに書けばそれらしいが、一〇数時間のブレイラー生活のはじまりである。臨席のノリコサマはすっかりお召し上がりになられ、食後のトークキングがお済みになるとアイマスクをしてご就眠。いつしか、ノースウエスト機の揺れに、アイマスクは目から鼻を滑り降り、口元を覆っている。口を覆うアイマスクに、ノリコサマ、時折息苦しうになさりながらも、日常と伝統から開放されたひとときの熟睡をご満喫していらつしやるようであった。そっとしてさし上げる。

通路を挟んだ席では、シゲルが不思議な運動を始め、みんなの視線が注がれる。シゲルはすでにトランス状態に入っているかのように、フェイスマッサージに始まり過激な外気功のような体操に没頭している。まるで質の高いパントマイムを見ているようだ。体操に続くお休み前の歯磨きも無声映画のコマ送りを見るようであった。一連のパフォーマンスが終わると、思わず拍手をしうになつたほどすばらしかった。おもしろそうだね、あれをシゲルに伝授してもらおうと話しながら、僕たちもつかの間の眠りに入った。ノリコサマ、アイマスクを口にしたまま熟睡。

二三時（ミネアポリス時間午前九時）、朝食に焼きそば。ノリコサマ、完食。急な生活の変化を心配していたが、ご健啖である。安心。ノリコサマご持参の自家製梅エキスをいただく、身体の芯からすつきりする。

日本時間七月九日、午前一時二六分（現地時間七月八日午前一時二六分）、ミネアポリス着。さあこれから

ら始まると思ったときだった、  
「あ：おみやげの荷物とってこなかった」

ユミコが訪問先へのおみやげ荷物を取り忘れてきたという（オーソーレミロー、はじまった）。  
やっと荷物がそろって荷物を乗り継ぎ便に預けたら、シズカがパスポートを入れたままでバッグを預けたという。鍵もかけていないという。いろいろある。なんでもおきる。いつものことである。

一日早く着いて買い物を楽しんでいたモッチーとも、はじめから一緒にいたかのように合流する。お待たせモッチー。乗り継ぎ便の出発までの時間、ヤマニーとモッチーは地ビールを楽しみながら過ごす。

#### デンバーはミネアポリスか

ミネアポリス快晴、ノースウエスト航空NW563便は、なぜか予定時間を大幅に遅れ一八時一〇分、デンバーに向けて離陸。

一八時四〇分、サンドイッチとリンゴの軽食が出される。小ぶりのリンゴは、リンゴらしい味がしておいしかった。

ウトウトしていると、着陸するので座席を元にとアナウンスがあり、目が覚める。二〇時三五分だ。降りてみると、空港内のバーやレストラン、ミネアポリスとそっくりの風景。おおデジャブー、デンバーの空港もミネアポリスもよく似ているお店が多いね、チェーン店かなといっているうちに、様子がおかしいことに気がつく。空港内放送で、デンバー行きの方は搭乗券の乗換手続きをするように、デンバーはストームのため今日の便はもう無いという。

どうも僕たちがウトウトしている間に、飛行機はストームのためデンバー空港に着陸できずに、ミネアポリスに引き返したらしい。ユミコがデンバーのガイドに電話を入れるが、捕まらない。会社ももう就業時間を過ぎてしまっている。

翌日のコロラドスプリングス直行便に乗換手続きをしている間に、空港職員は、休憩時間になると僕たちを待たせたまま姿を消してしまう。自分の勤務時間が終わった者はさっさと帰っていく。こちらでは、早く手続きを終えたいのか割り込みをしてもめている。むこうでは、子連れの黒人の姉さんが、段ボール箱に詰めた荷物を指さしながら空港職員ともめている。どうやら乗換便に積んでくれといっているが、きちんと荷造りができていないのでだめだといわれているようだ。双方ひかずに、ついに警官が呼ばれるが、姉さんも負けずにがんばる。結局、姉さん根負け、段ボール箱を担いで、大声で怒りながら子どもを連れて引きあげる。すごい迫力だ。絶対に謝らない、非を認めない。ああでなければ、この人種のるつぼの中では生き抜いていけないのだ。

そんなこんなに乗換にともなう空港内小事件の数々を見ながら、待つこと数時間、僕たちの乗換手続きはいっこうにはかどらない。ついに二、三人のスタッフと僕たちだけになる。やっと乗換手続きが終わり、荷物はすべてコンピューターで積み替えの確認がおこなわれたと空港の担当者の説明を受け、シズカのバッグからパスポートを取り出したら、もうホテル行きのリムジンの最終便。ノースウエストが配った緊急用のお泊まりセットをもらって、航空会社が手配したホテルホリデイインセレクトにいたのは夜中の一時だった。

朝一〇時のリムジンで再び空港にということを確認して就眠。九日、午前二時。

パイクスピーク（七月九日、ストームのため一日遅れでコロラドスプリングスに直行）

予期せぬストームの影響で予定変更の二日目。今日は何がおきるのだろうか、すでにハプニングを受け入れる心の準備をしながら、モーニングシャワーで目を覚まし、ホテル周辺を散歩。なにもない、まさに空港用のホテルである。予定どおり、一〇時、ホテルのリムジンで空港に向かう。三度目のミネアポリス空港、すでになじみになった空港内、みんな出発までのわずかな時間を買って楽しんでる。ランランズカも一人で走り回っている。

一二時三〇分、乗換便はコロラドスプリングスに向けて離陸。当初の計画では、このツアー初めてのくつろぎの日のはずであった。朝パイクスピークに登り、午後、神々の庭や士官学校、市内を見物してゆっくりとホテルに戻る、という予定は昨日もろくもストームの前に崩れさった。しかし、市内見物はなくてよいけど、コロラドの雄大な自然にふれずに帰れるものか。

#### 荒野に広がる緑の地上絵

「ふしぎですね〜」

「あれは何でしょう〜」

窓に張りつくようにして眼下の景色を眺めておられたノリコサマ。

その声につられて、飛行機の窓から地上を見ると、赤茶けた荒野の中に、ナスカの地上絵のように、いくつもの巨大な緑の円が並んでいる。なんだか時計の長針のようなものもついている。

「まん丸でしょう〜。ねえ〜」

「たくさんありますでしょう〜。何でしょう〜ねえ」

持参の単眼鏡で観察すると、時計の長針にみえたのは、水のない荒野で牧草や野菜を育てるためのスプリンクラーだった。そのスプリンクラーで散水される部分にだけ植物が育つ、それが巨大な緑の地上絵の正体だった。それにしても、果てしなく続く広い荒野に、いくつも並ぶ、大小の緑の地上絵は、日本では見る事のない不思議な光景だった。その眼下の光景に見とれながら、ハンバーガーとリンゴとジュースの軽食を、ノリコサマ完食。

## 荷物はどこへ

予定より少し遅れて、無事コロラドスプリングスに到着。現地のガイド小池が待っていた。気さくでとても頼りになる小池も、これからおきる事件にまだ気がついてはいない。

みんなホッとした表情で、

「もう大丈夫だね」

「これで荷物がこなかったりしてえ」

そんな冗談を交わすゆとりさえあった。

待つこと三〇分、僕たち以外の乗客はすべて自分の荷物を見つけて去っていき、そして再び、僕たちだけが取り残された。

まさか、冗談が冗談でなくなつた。小池が確認をすると、すでにミネアポリスには荷物はなく、コンピューターの操作ミスで、昨日到着予定だったデンバーに送られているのではないかとの説明であった。もちろん、合流したモッチーの荷物も同様である。

とにかく、無いものは仕方ない。夜までに宿泊予定のホテルにとどけてもらうように手配して、コロラドの大自然だけは、たとえ半日になつたとしても楽しもうということに決定。研修が主であっても、バイクスピークに登ることを目的に来たようなツアーである。雨が降ろうと、日が暮れようと、断固登らなければ。本来なら今朝、九時二〇分の電車に乗る予定であった登山電車は、予約で一杯。小池が素早く手配し、夕方の最終電車の予約が取れた。小池に感謝。

## 神々の庭

登山電車の時間まで神々の庭をめぐることになる。まさに神々の庭、一三五〇エーカーの広大な庭は、三億年前の大地の隆起で生まれた赤色の巨岩が天空に向かってそびえ立っている。

遠くから眺め、近寄って見上げ、

「うおー：：」

息をのむとはこのことか。みんなでただ感嘆。

ユミコとヤマニーは何を思ったのか、多くの観光客の目を気にもとめず、赤い大きな砂岩にできた窪地よじ登ろうとして転んでいる。それでもあきらめようとしなない二人に、

「カンセンセイ、僕の肩を踏み台にしてください」

「僕は体力だけあります」

ユミコを園芸療法の師と仰ぐシゲルの身を投げ出しての献身。怪力シゲルの肩を借り、二人は岩場に登り、瞑想（迷走）者のように座って喜ぶ。

その「人と自然社」の代表取締役と特別学術担当顧問のあまりにも真摯な戯れに、シゲル以外のツアーメンバーは、喜びながらも、あの人たちは同じ仲間ではありませんといった距離をとろうとしていた。肩を貸したシゲルは、これで「人と自然社」のグラビアを飾ることができると喜び勇んで、怪しいKAN・KANコンビの周りで、しきりにカメラのシャッターを切り続ける。そのシゲルのありようが、さらに状況の怪しさを増しているのであった。

なんと大自然の神々のおおらかなことよ。いまだ、KAN・KAN二人に天罰が下ったという噂は聞いていない。

#### 登山電車は山頂へ

マニトウから、最終の登山電車に乗る。四千メートルの高さでは、気圧が低くのが渴くから飲み物をもっていた方がいいとのアドバイスに、コロラドの水を買う。山頂に向かうオレンジ色の電車は単線で、途中降りてくる電車を待ちながら、急勾配の山肌を縫うようにして登っていく。

くぼみに残る雪、高山植物、ウサギ、鹿、自然がそのまま目の前にある。山頂に近づくにつれ小雨模様になるが、遠くの空は晴れている。パイクスピークの山頂は肌寒く、近づく雷雲のせいで空気中には静電気が充満していた。頭の周りでパチパチと音がする。女性の髪が空に吸い上げられるように逆立っている。頭上に雷雲、振り向けば青空、その色が西の方向に向けてグラデーションをかけたように夕焼け雲へと変わっている。三六〇度の空と地平線が、パノラマのように広がる。

ここが四千メートル、手を広げれば、そのまま滑空できそうな錯覚にとらわれる三六〇度の視界。他のみんな

なは、建物の中からでてこない。どうして。稲妻、雷雲、青空、夕焼け、大自然の神々のエネルギーが充満しているこの天空の台地に立って、じっとしているほうが無理。ヤマニーとユミコは、我を忘れて走り回る、歩き回る。

気圧の低さと寒さの中、山頂の名物ドーナツの油っこい甘さに身体が喜びをもって反応する。もっとも、思わず食べた三つのドーナツは、山を下るにつれ胸焼けの原因になった。

#### 最初の晚餐

一九時半、ホテル、ラマダ・イン・コロラド・スプリングスに到着。思えば昨夜は夕刻ここに到着し、ゆっくりとナイトキャップで眠るはずだった。ひとしお感慨を深くして、チェックインをすませるが、荷物はまだ届いていなかった。

ノリコサマ、マドンナアツコ、シズカと、近くのディスカウトリカーショップを探検し、最初のナイトセミナー用の飲み物を買う。後から行ったシゲルも、安いと感激して買い込んでくる。

まず先に、アメリカで最初の夕食をとりきったが、ホテルの周りは何もない。車でもない限りどうにもならない。プール付きモーターといった感じのホテルだ。しかたなく、ホテルのレストランで食べることにする。レストランはがらんとして誰もいない、貸し切り状態。一人呼び、二人呼び、結局全員そろったので、最初の晚餐となった。

「また、荷物がすれ違いになったりしてね。ははは」と誰かが言った。人は経験によって強くなるものである。

二一時半、女性陣は旅の疲れと明日からの研修に備えて、各自部屋に引きあげる。荷物はデンバー空港で見つけたとの連絡が入る。男どもは、荷物が届くまで起きていることを言い訳にして、バーシングルでナイトミールディングを始めた。

二四時、深夜のホテルの廊下をユミコがよろよろと走る。

ああ、荷物はまだとどかないのだ。

#### 不運な荷物

荷物はホテルの従業員がデンバー空港まで受け取りに行ったとのこと。ユミコがフロントから聞いた話では一時にはつくだらうという事だった。夜半にみんなを起こして荷物を配るのは大変なので、ヤマニーが全荷物の受け取りのために起きて待ち、ユミコには休んでもらうことにする。

一時二五分、フロントから荷物は朝になるかもしれないと連絡がある。仕方ないかと寝ることにし、ウトウトはじめたときにドアがノックされた。眠りに入りかけた脳を再起動させて、ドアを開けるヤマニー。フロントのスタッフがやつと荷物が届いたと部屋に運び込む。

数を数えると七つ。名札を確認すると、ユミコとモッチーのバッグ、そしてリバティ・インターナショナルが用意したおみやげがない。難事はまだ続いている。

ホテルのスタッフは、荷物はこれしかなかったという。深夜確認するすべもないので、とにかく七つの荷物を受け取って寝る。

不運な荷物よ。どこをさまよっているのだろうか？

受刑者の更正と医療刑務所（七月一日、プエブロ・ミニナム・センターの見学）

さあ、今日から今回の研修が始まる。昨夜届いた荷物をみんなに配る。パプニングシャワーですっかりタフになったメンバーは、もう何があっても驚かないといったたくましい風貌になっている。

朝食は、ホテルで準備されたコーヒートパン、ベーコン、ポテト。

今日は一日、プエブロ・ミニナム・センターや隣接するサン・カールロス更正施設などで、受刑者の更正のためのリハビリテーションと触法患者の医療刑務所におけるリハビリテーションを見学し、そのままデンバーに移動の予定。

### 三六〇度の地平線

七月一日快晴、八時四五分、ハッケンベリー運転のツアー専用バスで見学施設へと向かう。時速八〇マイル（約一三〇キロ）で、バスは平原の中の道路をひた走る。

右手遙か遠くに、ロッキーの山並みが見えるほかは、三六〇度、地平線。地面に張りつくように生えているブッシュと灌木の荒野が続く。

空気が澄んでいるのだろう、空が透明で抜けるように青い。

### 育てることがうれしい

プエブロ・ミニナム・センター Pueblo Minimum Center は、一九九四年にコロラド精神保健協会 Colorado Mental Health Institute 内に設立された、二五〇名あまりの女性受刑者の更正施設である。

事前に、施設内ではサンダル、ノースリーブ、ハーフパンツの着用は禁止という服装に関する注意があった。カメラや鞆などの持ち込みも禁止されているため、施設入口ですべて預ける。

こうした対応にやや緊張しながら事務所に入ると、飲み物や果物ケーキで職員から歓迎をうける。今日は、僕たちが日本から訪問するのを地域の報道機関が取材するのでよろしくといわれる。しばらくしてカメラマンやインタビュアーが州の教育関係の役人と到着。僕たちの見学目的やコロラドに関する感想などを取材したあとで、一緒に施設見学に移る。

社会復帰に取り組む女性受刑者の園芸活動を見学に、はるばる日本からきたということが、その日の地元テレビのニュースになり、翌日の新聞の記事にもなった。バンダナを頭に巻き、植物に見入るシゲルの写真が大きく新聞を飾った。

園芸活動を取り入れた施設では、数名の受刑者が作業をしながら僕たち一行を待っていた。その一人ジェニーが、僕たちの訪問のために練習したんだよと、はにかみながら挨拶。自分が植物の面倒をみる、育てる、そうした自分の努力に応える植物があるということが、自身を取りもどす力になったという。失敗しないでね、がばってねといったまなざしで、挨拶する仲間を見ていた他の受刑者たちも、その部分では大きくうなずきながら聞いていた。

育てることがうれしいという。ひとはあてにされている自分に気がついたとき、自分の存在を自らが受け入れるようになる。自分が育てる植物に、自分が育てられる。作業療法の原点をみるようだ。

二〇〇〇平方フィートの温室には、さまざまな観葉植物や野菜が育てられていた。温室の外にはハーブガーデンがあり、新しく現在の六倍の広さの温室が建設中であった。

### 復権への道

州立の教育関係の部門が関わっているこの施設では、園芸は職業訓練の一環としておこなわれている。最初のトレーニングは半年間で、月曜から金曜まで、午前中講義を受け午後実習。植物に関する基本知識と屋内外における植物の利用法、野菜の栽培から花壇の設計までと幅広く、八五点以上とらないと合格点がもらえないという厳しさ。

そのプログラムが終了すると、労働省の職業訓練プログラムの受講資格が与えられ、造園に関するメンテナンスの見習い訓練を一年間、温室管理の見習い訓練を三年間おこなう。全部で六〇四〇時間のプログラムを終えると、地域で実際に就労の道が開けているという。このシステムが始まってから、一名の女性受刑者が地域に戻り就労していると聞いた。

刑務所ではあるが、できるだけ開放的な処遇になるような工夫が随所にみられた。施設全体が広々としており、監視されているという印象は受けなかった。配慮が行き届いている。

模範生になると、プエブロ・コミュニティ・カレッジの芝生や植えてある植物の管理など、自分たちの訓練を実際の社会における仕事としておこなうというシステムもとられている。

そのほかにもいろいろあるプログラムがあったが、社会に戻ってから引け目を感じたり、学歴などで不利にならないようにと、高校卒業の資格が取れたり、コンピューター操作など流行りの仕事にも就くことができるようなプログラムが準備されている。

簡単な礼拝ができる場所やレクリエーション施設などもあり、約三〇〇〇人のボランティアが関わっているということであった。服役期間が五年未満の比較的刑の軽い受刑者が対象であるが、社会に戻ってからいかに

同じ道を歩まないようにするか、事件の再発を防止するというところに行政が力を入れていることが分かる。復権への道は、受刑者自身にとつても、また受け入れる社会にとつても、開かれた可能性としての道でなければならぬ。人手と費用を何に使うか、この施設は、この国がさまざまな文化的背景をもった人の集まりの中で見いだした合理的活路としてのパイロット的事業にあたる。

#### 医療刑務所

園芸プログラムは、週一回だけであるが、隣接する医療刑務所にあたるサン・カールロス更正施設 San Carlos Correctional Facility でもおこなわれている。

ここは、いわゆる触法患者にあたる精神障害や知的な発達障害がある収監者のための特殊教育更正施設である。一九九五年に開設された施設で、アメリカでもこうした施設はまだ少なく、全米から注目されている施設ということであった。二五〇人が収容されているが、今年中に五〇〇名規模になるという。

一九六〇年代に、一病院で五〇〇〇床以上もある巨大な公立精神病院を次々と縮小し、多くの精神障害者が地域ケアという名の下に開放された。ベトナム戦争による医療費の逼迫という理由が背景にあつてのことであり、十分な外来治療と生活支援環境のない中での開放は、さまざまな社会的問題を生んだ。そして、マネージドケアが拍車をかけるように入院期間を極端に短縮したため、長期に療養が必要な重度の精神障害者だけでなく、治療と休息が必要な患者たちも短期間で地域に帰されるため、入院を繰り返す回転ドア現象や、多くのホームレス（ニューヨークではホームレスの二〜三割が精神障害者といわれている）を生み、犯罪に巻き込まれた精神障害者が治療を受けられないまま、一般の犯罪者とともに刑務所で過ごすことになり、保護の必要性

が叫ばれている。長期収容を行ってきた病院の問題を問い、早期に退院を促すのはいいが、地域で暮らしながら治療を受けられ生活を支援する環境がないことが引きおこした結果である。アメリカの精神医療を暗く覆う背景があり、こうした医療刑務所が試みはじめられたのである。

施設は全閉鎖の古い精神病院か刑務所を回想したような構造。数十人が歩き回れる程度の中庭を囲んで収監棟がある。中庭はコンクリートで舗装され、プランターや鉢植えのわずかな緑があるだけの殺風景なものであった。

食事時間は、七時、一〇時半、三時四五分となっており、昔の日本の精神病院のようである。午前七時一五分から午後八時一五分まで、更正プログラムのタイムスケジュールが決められている。治療プログラムとしては、感情コントロール、読み書き、コミュニケーション技能のトレーニングがある。知的発達障害がある人たちの更正指導は、精神障害に対するトレーニングを受けた特殊教育の教師が行っている。IQの平均は六八程度であり、個人のレベルに応じて、すべて小グループによるアプローチがなされている。こうした更正のためのプログラムは、対象者により半年から一年半おこなわれる。

その他に授産プログラムや週四回あり、主にワークパーソナリティのトレーニングとしておこなわれている。授産プログラムには、発達上の障害や精神障害がある人たちだけでなく、障害がない一般の収監者も利用できるようになっており、作業内容により一日三〇セントから一ドル五〇セントが支払われている。

わが国では、人権の問題がまだ十分に解決されていないため、こうした施設がない。そのため、精神障害の疑いがあれば、すべて一般の精神病院に入院させられるため、アメリカとは逆に、普通に精神障害の治療のために入院している人たちの環境が損なわれている現実がある。触法にあたり、心神喪失状態、心神耗弱状態であれば、罪を問われなかったり、軽くなったりするためと思われるが、何か人身に関する犯罪があるたびに、

マスコミは精神病罹患や入院・通院経験の有無をセンセーショナルに報道する。「病気の有無にかかわらず、罪は罪として償わないと、精神障害があり治療を受けたり生活している者みんなが、偏見の目で見られたり差別を受ける」と僕たちが支援している授産施設の通所者がいう。病気の治療と犯した罪を償うことをどのように並立させるか、わが国にとっては大きな課題である。

### お詫びの日本食

更正施設と医療刑務所の見学を終え、一路、専用バスでデンバーに向かう。およそ二時間弱のドライブで、これから四泊することになるホテル、コンフォート・イン・ダウンタウンに到着。ユミコのバッグは見つかり送られてきているが、モッチーの荷物はまだ不明だという。

今回のツアーの企画をした国際治療教育研究所の藤井所長が、度重なるハプニングのお詫びに夕食をごちそうしてくださることになったので案内しますとガイド小池。日本食の店だという。それは申し訳ないねといつつ、昨年のツアーでトロントのホテルで食べた日本食のことを思いだし、思わずキクチャンと顔を見合わせる。そして、ひとしきり、あの和食と書かれた無国籍料理の味の話に花が咲いた。

出された日本食は、天ぷらやあげ餃子、酢の物、炊き合わせと幕の内風に何でも詰め合わせた少し変わった組み合わせ。しかし、昨年のトロントのホテルの和食とは大違い、日本の味に近かった。まだ日本を離れて数日なのに、なんだか少しホッとする。

国際治療教育研究所のせいではないハプニングのおかげで、思わぬ日本食の夕食となった。その味が気持ちをゆるませたのか、それぞれ中年の男性たちが自分の人生を語りはじめた。シゲルが語る、イッシーが、ガイ

ドの小池も語る。異国の地で日本食の夕餉は、同世代を過ごした男たちの普遍的な体験を確かめ合う時間となった。

すっかり涙腺のゆるんだシゲルは、中年のウエイトレスに、

「日本は恋しくありませんか」

「寂しくありませんか」

ああ、シゲル、先ほど問わず語りに語ったことで、自分の家族のことを思いだしているのだろう。泣くなシゲル。みんな君を愛しているよ。

こうまでびびるリハビリテーション(七月一日、クレイグ病院)

七月一日、快晴。今日は一日、US News & World Report 誌の優良リハビリテーション病院部門の六位に入っているリハビリテーションセンター、クレイグ病院 Craig Hospital を見学する。夕方は、二〇〇一アメリカ園芸療法協会年次大会の受付とレセプションに参加する予定。

#### 最高水準のリハビリテーション

クレイグ病院は脊髄損傷や外傷性脳障害に対するリハビリテーションとその研究で、アメリカでは最も優れた病院の一つと認められている。障害の原因は自動車事故や転倒が八割余りを占めている。一〇〇床に満たない病床に、常勤の四〇〇名を中心に七〇〇人あまりの医療スタッフがはたらき、患者や家族の教育用にリハビリテーションの様子を撮影編集し、提供。個室はワンルームマンション程度のすべての生活設備が整っており、家族と一緒に住むこともできる。必要な情報と機器、医師、看護、理学療法士、作業療法士、言語療法士、レクリエーション療法士などのスタッフ、必要な限り続ける退院後のサポートと、リハビリテーションとしては最高水準にある。年間五〇〇人あまりが入院し、一五〇〇人が外来で診療を受けている。

#### 医療者の良心

ここでも、マネージドケアの問題が話された。

「一般の病院では、園芸療法やレクリエーションなど補助的療法は保険の支払い対象から外されはじめています。しかし、クレイグでは保険会社を説得し、その必要性を認めさせているのです。必要で適切な治療がおこ

なわれることが、結果的には経済的でもあるということを主張します」

「普通の保険会社は、リハビリテーション病院の入院を二週間しか認めないが、通常の身体の麻痺で六〇日、C1から7の頸損だと一〇〇日は必要になります。クレイグの平均入院期間は、全米平均の二倍かけています」患者の治療に必要なことをきちんとする、それが医療者の良心と案内役のカウンセラーケニーはいう。

#### 買い取った車いす会社

さらに驚いたことには、脊髄損傷の人たちに欠かせない車いすを個々にあつたものにするために、車いす会社を買い取ってしまったという。作業療法士が患者一人ひとりに応じた車いすをデザインし、病院内で作成している。

自助具の制作には、障害があるスタッフも参加していて、使い勝手を確認し、工夫を重ねていた。実際に、市販の車いすにはない工夫や自助具が作られ、臨床に即した研究がなされていた。

#### レクリエーション

クレイグ病院のリハビリテーションの特徴は、障害があってもできないことはないという夢を持たせるプログラムにある。釣り、運転、キャンプ、本人がしたいとのぞめば、スタッフはどんなことにも一緒にチャレンジし工夫する。七人の常勤と三人のパートのレクリエーション療法士がいて、早期からリハビリテーションプログラムにレクリエーションを取り入れている。絵画、手工芸、創作活動、スポーツ、ゲームと従来作業療

法士が行っていた作業種目は、ADLを除いてすべて彼らが行っていた。作業療法士は二五人いて、一人が一日五〜六人の患者を担当し、肢位やADLの評価や、理学療法士や言語療法士とくんで呆けー初なるトレーニングをしているという。作業を捨てた作業療法士の専門性が本当にこれでいいのだろうか。作業療法は生活を構成するさまざまな作業活動をもちいて生活の再建、自律と適応を支援する専門職ではなかったのか。この病院では作業療法士の影は薄かった。

園芸活動もレクリエーション部門に属し、園芸療法士スージーを中心に一〇人あまりのスタッフが屋内外いろいろなどところで水と緑を楽しむことができるように常にメンテナンスが行き届いていた。

また、コロラド大学と提携し農業従事者が障害を持った場合でも元の仕事に戻れるようにと、政府の助成を受けてトラクターなどの農業機器の改良やトレーニングを行っている。年間一五〜六人くらいが農業に復帰しており、C5レベルの頸損や両手と片足を切断した人が酪農の仕事に復帰しているという。

#### だれが利用できるのか？

このすばらしいリハビリテーション病院、保険で利用するには最も保障の高い保険に加入するか自費になるが、入院費用は軽い障害で一日一二〇〇\$、重度障害で二〇〇〇\$程度だという。

アメリカ園芸療法協会レセプション（七月一日、夕方）

クレイグ病院の見学を終えてホテルに戻ると、やっとモッチーの荷物が届いていた。一休みして、アメリカ園芸療法協会の年次大会 The 2001 Annual Conference of AHIA のレセプションに参加する予定。ユニコシヤチヨウより、レセプション会場では各自片言、単語の羅列でもでもいいから、とにかく自分であるんな人とコミュニケーションを図るようにと一同にお達しがあった。

#### 忘れられたベッドメイキング

自分の部屋に戻り、トイレに入るとサニタリー用品もタオルの使用された形跡がある。ベッドもシーツがめくれ、使われた跡がありありとわかる。あわてて部屋を出て、フロントに部屋の変更があったのか聞きに行くと、お客様が連泊のままですといわれる。

怪しい。もう一度引き返してよくみると、朝出た時のままだ。チップも枕の上に置いたままだった。そうか、ベッドメイキングが終わっていないだけなのか。あらためてフロントにベッドメイキングが終わっていないことを告げるが、午前中にすませたはずだといいかげん。しかたがないので、廊下を掃除していたおばさんに直接頼んで部屋を見てもらうと、「あらそうね、してないわね」とあっさり。これから急いでするけど、三〇分はかかるといわれる。ハイハイ。

掃除が終わりシャワーを使ってスッキリし、レセプション会場に行くためにホテルのロビーで待ち合わせていると、見覚えのある人たちが何人かいる。どうもこのホテルは、アメリカ園芸療法協会年次大会参加者の宿泊ホテルになっているようだ。ボディールのところ研修している日本の研修生とも再会。

## 懐かしい顔

レセプション会場は宿泊ホテルから歩いて数分。参加登録をすませる。立食形式の和やかなレセプションは、各地からの参加者で大変な賑わい。どの学会や大会でも、同じ仕事をしている人たちと、時には数年に一度の顔合わせとなるレセプション。あちこちで交流の輪が次々と生まれる。ポール、ウオーリー、会長のカレン、一年前のツアーでお世話になった人たちとの再会を懐かしみながら、何人かの新しい出会いも生まれた。こうしたレセプションが大会の前にあるというのはいい。前夜祭のような雰囲気、参加者が自由に交流できる。時に華美なアトラクションなどがおこなわれるものもあるが、普段出会う機会のない同業の人たちがコミュニケーションを楽しむには、アットホームなものがいい。

僕たちとは別に日本からの参加者が二名いた。それぞれ個人での参加だという。

Dr、ヤマニー

もらった抄録集を見ると、僕の名前が一部分で Dr. Yamani と紹介されていた。そのとき、だが、ヤマネよりヤマニーのほうがらしいねという。何がしかわからないが、周りにいたみんなが同意。そのときからこれまで、ヒロボー、ひろしくん、ヤマネ、センセイとさまざまな呼称をもっていた僕のトップネームにヤマニーが躍り出た。ヤマニーはまもなく、ヤマジーになり、ジージヤマへと変化していくことを予感させるに十分な響きをもっていた。

ナイトセッション(七月一日、夜)

レセプションでの交流がひととおり終わると、だからとなく市内探索をという声があがる。そう言えば、このツアーはハプニング続きで、のんびり市内観光などする時間がなかった。夜のデンバー一六番街をウインドーショッピングしながら歩いてみることになる。

ついでに何か軽い食べ物や飲み物を手に入れて、ツアー恒例のナイトセッションを開くことに決定。正式なバーシングル開店準備の買い出しが始まった。

カップヌードルが食べたい？

冷やかしショッピングをしながら、フードショップに。  
だれかが、

「あくカップヌードルが食べたい」

そうか、一昔前は、日本を離れて旅に出ると、みそ汁だとか梅干しだとか、お茶漬けだとかいっていたのに、今はカップヌードルが懐かしい味覚になったのか。

というわけで、即席のみそ汁でも梅干しでも納豆でも豆腐でもなく、懐かしの味覚カップヌードルにその他スナックやジュース類を買い込む。

「おかしいな」

「うんおかしい」

何がおかしいといって、どこにもビールを売っていないのである。

シングルと二人、急遽ビール調達人に自己推薦。デンバーの夜の町を探してまわるが、酒屋も自動販売機もな

い。どうやら、コンビニや駅の売店でアルコールを売り、町の中にもそしてホテルの中にもビールの自動販売機があるのは日本だけだということに気がつく。分かってはいたが、実感。

スタディだよ

それでも懲りないのが、シゲルとヤマニ。そしてイツシー、モッチーも口には出さないが一日の終わりの冷たいビールを心待ちにしている。手ぶらで帰った僕たちは、さっそくルームサービスでビールを注文。バド一五本という数に、電話の向こうの声が一瞬泊まり、

「グラスはいくつにいたしましょう」

「九つ」

……少し間があり、

「承知しました」

シゲルとイツシーのツインの部屋に一五本のビールと九つのグラス。それは、レストランの従業員に一瞬間を生ませる力をもっていたらしい。

コッコツ、ノックの音。部屋の中は、床に新聞が広げられ、スナックやつまみ、ジュース類が並び、周囲に年齢不詳の男女が車座になっている。ビールを運んできたウェイターは、驚きの表情を隠しきれないまま、にやつと笑って、

「学生のツアー中のパーティーですか」

「ノーノー、スタディーツアーだよ、これはナイトセミナーなんだ」

と答えるが、どうもジョークだと思われたらしい。

もつとも、その夜はいくつもの部屋から、夜遅くまで笑い声や大きな話し声が響き渡っていた。園芸療法の年次大会に出席した各地のメンバーの交流パーティーがどの部屋でも開かれていたようだ。

シゲルのつつこみ

ツアー初めてのくつろいだ自己紹介と、感想を語る時間がはじまる。しかしシゲルは、人と接する喜びのあまり、わき起こるバトルコミュニケーションの衝動を抑えきれないようであった。

夜行性齧歯類人依存性亜目シゲルは、日が沈むと元気になり、急に活動性が増し、能弁多弁になる。ナイトセッションの準備が整ったときには、すでにその夜行性の特徴が目覚めていた。自己紹介をするわずかな言葉の隙を見つけては素早いつつこみをはじめ。

すばやい。するどい。危うい。そのシゲルのつつこみをかわしながら、それぞれに自分がツアーに参加することを決めたいきさつや、今回の感想、これまでの体験などが語られた。

オダマリシゲル

そのナイトセッションの流れをファシリテイトあるいはアドミニストレイトしたのは、カリスママリオネッターことキクチャン。シゲルのつつこみの度が過ぎて、発言者が困ると、絶妙なタイミングで、

「人の話をじゃましちやだめでしょ」

「少し黙って聞きなさい」

そしてついて出た、一言。

「オダマリ！シゲル！」

その瞬間、夜行性齧歯類人依存性亜目シゲルの和名通称は、オダマリシゲルになった。僕たちはある生物の非学術的呼称決定の瞬間に立ち会うこととなったのだ。なにしろプエブロでは写真入りで新聞に紹介され、テレビのニュースにも出たブリタニカやオックスフォード英英辞典に、*odamari-sigeru* がそのまま新用語として載るのも、そんなに先のことではないかもしれない。

オダマリシゲル、オダマリシゲル、ああ、何という心地よい響きだろうか。しかし、これは決してシゲルの職場で使ってはならない通称名であろう。オダマリシゲル。

ひとが支える(七月二日、クアライフ)

クアライフ Qualife は癌や難病の人たちの地域における生活を支援する非営利の団体。一日僕たちのための歓迎プログラムに招待される。住宅街にある一戸建ての家を改装した施設で、施設といわれなければだれも気がつかないアットホームな造りが印象的だった。

#### 癒しのウエルカム

死にゆく人たちとどのようにつきあうか、施設の中はだれでも訪れて過ごすことができるようになっており、普通の住宅を工夫したという雰囲気。瞑想の部屋、音楽療法やアロマセラピーやマツサージルーム、絵画療法の部屋など、それぞれ小グループで活動ができるようになっていく。庭は、デンバー植物園のインターンの支援を得て、ヒーリングガーデンを作っている途中だった。小さな滝や木陰、菜園、芝生のある外連みのない落ちついた雰囲気の庭ができあがりそうだった。

こうした活動は、すべて寄付で賄われており、常勤スタッフは受付と助成金を得るための担当者二人だけで、後は非常勤やボランティアである。メディカルサービスは他で受けている人たちの人生のサポートが主な活動であるが、最初は賛同者だけでなく反対する人たちも多かったという。スタッフは必要な寄付や支援を求めるのが一苦労といえながら、まず反対する人を招いたり、目的をはっきりと示し、核になる人たちには最初から関わってもらうなど、しつかりとした努力がされているのが印象的だった。

収入や人種も何も問うことなく、訪れる人はだれでも受け入れ、所得の低い人たちには医療的なサポートをしている。一日の利用者は三〇名程度で、必要に応じて訪問もしているとのことであった。安心して訪れ、話を聞いてもらい、憩うこと嘆くことのできる場が地域にあるということの意味をあらためて考えさせられた。

そして、何よりも迎えるスタッフのウェルカム精神が癒しの空間を作っている。そのことに初めて訪れたとは思えないくつろぎを感じた。

#### 少し危うさも

僕たちにもプログラムの験をということで、「はーる」ドンドン、「なーつ」ドンドン、「あーき」ドンドン、「ふーゆ」ドンドン、一人ひとりがちわ太鼓をたたきながら声を上げて、数珠繋ぎになって室内をあちこち歩き回り、床に曼陀羅の描いてある絵画の部屋でイメージ画を描くというセッションを経験した。

音楽療法夜会が療法などを少し取り入れているのだろうが、お盆サイズのミニチュアの石庭がおいてあったり、床に曼陀羅が描いてあったりと、何となく似非東洋的なしつらえと中途半端な療法的技法には、少し怪しさを感じた。せつかくのスタッフの努力や基本的な精神に似つかわしくない印象を受けた。あの精神ありのままに感じようを感じた。

#### ツアーメンバーの感想

#### ツアーメンバーの感想

ウシもエドモ (七月二日)

コロラドにきたのだから厚いステーキを食べなければ帰れない。誰がいいだしたのか、クアライフでヒーリングタイムをすごして、腹も空き頃。帰りのバスではどうしてステーキハウスを探るか、ああだこうだと、情報や意見が飛びかう。こんなときには地元の情報が一番、バスドライバーに教えてもらって、さあ直行。

コロラドステーキを探せ

シゲルは、

「ウシを食べないと。ウシ、ウシ、ウシ」

「コロラドにきたら、ウシ」

と、口を開けばウシが食べたいという。

コロラドステーキ、コロラドステーキ、いつのまにかみんなの頭のなかは、もうステーキのことばかり。メンバーの町をステーキの店を探して歩く一行。

「吉川さん、ステーキでもいいですか」

一番年輩のノリコサマの胃袋を気遣うと、

「えくえく、みなさんと一緒に大丈夫ですよ。なくんでもいただきますよ」

と頼もしいお言葉。

教えられた店にはいると、満席に近い。ご予約のお客様ですかと尋ねられ、そうじゃないけどと遠慮がちに人数を伝える。巨漢のオヤジが席の予約具合を調べて、

「よかったですね、なんとかなります」

僕たちの後からきた予約無しグループは、席が空くまで待つようにいわれていた。あと数分遅れれば、僕たちが待つことになっていたのだろう。

案内された席に着くと、ウェイターがさまざまな部位の肉のかたまりをワゴンに乗せて見せにくる。それを見ただけで、思わずみんな感嘆のため息。それぞれの肉の説明が終わると、なんと五〇センチはあろうかと思われるオマールエビが紹介される。

「ウシもエビも食べよう」  
すかさず、みんなの思いを代表するように、シゲルがいう。

それではということ、いろいろな部位のステーキとオマールエビの丸焼き、ビールにカリフォルニアワインが注文される。シゲルの目は輝き、シズカはガッツポーズでリキを入れている。

### 丸ごとオマールエビ

運ばれてくる豪快なステーキに、一瞬ナイフを入れるのを忘れ、みんな、ああこれこれと、くり返しうなずく。ではと、ステーキを切り分け、口に運ぶ。神戸牛や松阪牛、但馬牛、近江牛など、我が子のように育てられる和牛のような霜降りのジューシーさや味わいの深さには欠けるが、口いっぱい食べ応えのある豪快さがアメリカンステーキ。

しばらく無言でモグモグ、モグモグ。そして、互いに顔を見合わせて、また納得のうなずきを交す。しかし、その納得の時間を見計らったように登場したあのオマールエビの丸焼き。大きなハサミの先とピンと張ったしっぽが大皿からはみ出している。どうだといわんばかりの、威風堂々の丸ごとオマールエビの登場に、一

同の気持ちは一気にウシからエビに急旋回。

甲冑のような殻に包まれたプリントとはじけるような薄いピンクの身、格闘の末砕いたハサミのなかにいっぱい詰まった白い身、みんなの目が丸ごとオマールエビに釘付けになる。マドンナアツコが、ぶんどった宝物を分配するマフィアの姉御のように、みんなにエビを分けてくれる。そして、また、しばし無言で、モグモグ。キクチャンも食べる、シズカも食べる、イッシーもモッチーもひたすら食べる。もちろんノリコサマご完食。

### 齧歯類のしぐさ

食べても食べても減らない、ウシとエビ。もういっぱいといいながら、残しちゃいけないね、誰か食べなよと、お互いに譲り合う。みんなの目が、一番ウシ、ウシといていたシゲルに注がれる。その視線を察したように、

「もったいないから食べます」

ああそれで、ウシもエビも救われると、残りのステーキとエビをシゲルの皿に移す。こんなに食べられるだろうかというみんなの心配をよそに、

カキカキ：：、ホジホジ：：、ムシヤムシヤ：：

シゲルは齧歯類のごとく、リスが冬眠に備えてドングリを食べるような早さで食べはじめた。

ああ、その食欲、豪快、爽快。一言もしゃべることなく、ひたすら食べ続ける。その姿に感動。ああそのときだけ、オダマリシゲル返上、好きなだけオタバシゲル。

ベレー帽スフレ

デザートがやってきた。スフレとケーキ。

「……………」

息をのむというより、息が詰まってしまった。ケーキも普通の二、三倍はあるが、圧巻はスフレ。なんとサラダボールにベレー帽を乗せてだされたのかと見まちがう大きさ。四、五人で食べるのかと思っていると、注文した数だけ、ベレー帽スフレがテーブルに。

「……………」

みんな手がでない。

「甘いものは別腹」

さすがに若さ、シズカとキクチャンが手をつける。食べても半分も減らない。ついにお持ち帰り用に包んでもらう。味よりなにより量のアメリカ。

## アメリカ園芸療法協会の光と影（七月二三日）

朝九時、アメリカ園芸療法協会 American Horticultural Therapy Association (AHTA) のチャーターバスで二〇〇一年 AHTA 会議の会場であるデンバー植物園に向かう。この大会への参加は、今回のツアーの目玉の一つである。アメリカの園芸療法の実情を専門職の集まりから知ることと今後の日米の園芸療法に関する交流のありようを検討するという目的があった。

大会は一二時からなので、午前中は、水をうまく行かしたデンバー植物園を散策。

## 総会はランチで

総会はランチをとりながらの和やかなものだった。日本の学会における総会は、理事や運営にあたるスタッフが大半で、学会参加者も多くは委任状を出して出席しない、お手盛りのようなものが多い。参加費用にすべてこうした経費が含まれているのだから、ランチをとりながらの総会はなかなかよかった。

最も、この年次大会そのものが、通常の学会と違って、アメリカに数十あるといわれるさまざまな園芸療法に関連するグループが年に一回集まって、近況を話しあい、お互いの交流を図ったりビジネスの場に使ったりといった場であるからかもしれない。

発表された内容は、諸物の扱い方や園芸活動をもちいる場の開拓や以下に援助金を得るかといったようなものであった。年次大会のテーマは、「人と植物の関係を開拓する」という大きなものであったが、協会認定という国家資格とは違う資格の中で、十分医療やリハビリテーションとの連携がとれていない現状が浮き彫りにされた。それが AHTA の一番の弱点だろう。

評価表はないのよ

僕たちが参加したパネルディスカッションは、ユミコとヤマニーが日本における園芸活動園芸療法の現状を發表し、日米がどのように協力できるか検討するという企画であった。

大学で園芸療法を担当するダイアン・レルフ、実践家のボデイル、協会長のカレンというそうそうたるメンバーのパネルディスカッションではあったが、正直なところ実りになる目新しい収穫はなかった。示唆されたのはこれまで同様のこと、

①日本にも共通に園芸療法を語る場を作ったほうがよい（これはすでに人間と植物関係学会が立ち上がっている）

②日本にも植物に関しては牧野富太郎のようにしっかりした研究者も出ており、自国の風土に目を向けては（以前からいつているのに、拝外主義者が多い）

③これまでに研修して帰った人たちが連携したらどうか（そのためにユミコは人と自然社と設立した）といったものであった。

そして、これはそのときアメリカに学びに来ていた日本人研修生の、園芸療法の評価は協会として統一したのもをもっているかという質問に、ダイアンはこれまで同様「ない」と一言。施設に独自の評価表があるので統一したものはなく活動で気がついたことを記録すればいいというが、現在施設にあるものは、いずれも植物や園芸作業に関するもので、療法としての視点から見た評価表はない。アメリカの補助的療法が、療法といながら、たとえば園芸療法であれば、主として農林業、造園関係の出身者によって教育指導されており、植物の特性や育成、環境の整備といったことに関しては造詣が深く見習うものが多いが、医学的知識や技術をべー

スにした障害の評価の基本、リハビリテーションに対する基本的概念がかけていることが問題となっている。福祉面に関する知識においても十分ではないように思われた。このこと自体が最大の問題でもある。

### 活動と療法

昨年のツアーレポート（グリーン情報323、325、326、328）で指摘した

①補助的療法としての園芸療法の位置づけ

②専門分化による問題

③評価と治療計画が十分なされていない

④作業分析が十分なされていない

⑤過剰なマネージドケアの弊害

に対する対処は全くなされていない。少し厳しい感想であるが、すでに日米双方の問題と課題は明らかにされており、あとは以下にその課題を超えていくか、丸ごと輸入しても意味がない、連携すべき点をしぼることにある。

園芸という活動がいかに優れた特性をもっていたとしても、療法としてもちいる場合には、適応対象とその評価、療法としての目標と治療計画、手段である園芸活動の機能分析、期待される効果と効果判定など、療法としての根拠が問われる。

アメリカの園芸療法は経験的には優れた植物の利用をしながら、心身の機能との関係における作業の特性分析、病理特に目に見えにくい心理的問題に対する知識や対処技術といった医療やリハビリテーションに関する

ものが大きく不足している。そのため、クレイグ病院のように医療スタッフが充実し常にカンファレンスがおこなわれている限られた施設を除けば、療法としての対象者の評価と治療計画が不十分なまま実施されている。療法という名で独立させた分業によるマイナス面といえよう。医療やリハビリテーションの領域で、療法として位置づけるには適切な評価と計画に基づいて実施することが求められる。そのためには、園芸療法士自身、もしくは作業療法士などと連携して、園芸という活動の分析と効果判定をおこなうことが必要である。

最後の晚餐（七月二三日）

シンポジウムが終わって、デンバー最後の夜。明日は成田に向けて、またかこの鳥。大会を途中で抜けだして町にでたモッチーとホテルで待ち合わせ、デンバー最後の夜の散策を計画しているため、ホテル行きにバスに乗る。

横に走るイナズマ

ポツポツと大粒の雨が、バスの屋根を打ち始めたかと思う間もなく、一転にわかにかき曇り、スコールのよ  
うな雨。大音響と共にイナズマが走る。切り裂きジャックが暗幕を裂いたかのように、空を横一文字に切り裂  
く。  
もうなじみになったデンバーの日課のような自然。雨に情緒なんてみじんもない。ただ、毎日同じ時刻に、  
空がバケツをひっくり返すだけ。そして、一日の憂さを晴らすように、仕事は終わりのベルのように、稲光と  
共に空が吼える。

一六番街

ホテルについてしばらくすると、雨は止みはじめた。一六番街を散策しよう。ウィンドーショッピングをし  
ながら、

「もう今日はウシもエビもいいね」

「なにか違うものになろう」

これはと思う店はどこも予約がいっぱい。ウィークエンドの一六番街は若者で埋まっている。やっと見つかった九人のグループが入れるレストランは、四五分待ち。

ビールを飲みながら、待っているとボディールのグループもやってきた。やはり、どこもいっぱいこの店で待つことにしたという。

#### 再び齧歯類のごとく

陽気なウエイトレスに軽口をたたきながら、最後の晚餐はピザにパスタ、無国籍風ピラフ、サラダとビール。そして、

「トリ、トリの丸焼きが食べたい」

というシゲルの希望に応えて、トリの丸焼き。

予想はしていたが、このまま成人病になるのかと思うような味と量。最後にトリの丸焼きが登場する頃には、堪能を超えてしまっている。それぞれに味見はするが、誰がいうともなく、オタベシゲル。

「食べたいと言った人が責任もってね」

超人、鉄の胃袋をもつシゲルは再び齧歯類のごとくトリに取り組む。またたくまに、肉片のひとつもついていないホネの山。

「ウシもエビもトリも食べた」

シゲルはすっかりアメリカカを食べ尽くしたようににこにこしている。

#### デンバーの夜は更けて

食べたね。終わりだね。デンバーの夜の町を、みんなで散歩しながらホテルに帰る。帰り支度があると部屋に引き上げはじめる面々。イッシーは明日からみんなと別れてしばらく友人の元で放浪。

ディスカウトリカーショップで買ったワインが残っているので片づけたいというシゲル。その誘惑に負けたふりをして、寂しがりやのヤマニーは、最後のデンバーの夜をシゲルと二人でワインでラストパーティー。

#### ランランシズカの夜歩き

少し疲れのあるヤマニーを気遣って二時にはお休みといって、ヤマニーの部屋を出たシゲル。少し酔いを醒まそうと一階のロビーでソファに座っていると、ランニングスタイルのシズカが降りてきた。

「よこほろび」

と、真夜中のランニングスタイルのシズカにシゲルが聞くと、

「ちよつと町をウォーキング」

こんな夜中に危ないよ、大丈夫、ああ、ランランシズカは深夜のデンバーの町に飛び出してしまった。そうして一時間あまり、シゲルはシズカの身を案じて、シズカの夜歩きにつきあつたと、夜が明けてから聞いた。

路地で深夜族に囲まれてちよつと恐かったとシゲルは言うが、恐いもの知らずのシズカはニコニコ。

デンバー発ミネアポリス・成田（七月二四日、一五日）

今回のツアーのプログラムはすべて終了。デンバー空港より成田へ帰路。ミネアポリス経由で、一〇数時間の飛行、日付変更線を越え、日本時間七月一五日の夕刻になる予定である。むかえにきた小池ガイドの案内で、九時、デンバー空港に向かう。

### 家が動いている

再び、広野をただひたすらまっすぐの続いている道路を走る。延々と変わりのない風景が続くなかに、忽然と現れた家、何でこんなところにと思ってみると、家が動いている。大型のトレーラーのようなもので家を引っ張っていた。家ごと持ち上げられ、車輪のついた台車の上に家が乗っている。

このあたりでは、時々家ごと転居することがあると、小池ガイドがこともなげに言う。起伏の激しい土地や狭いところでは考えられないことだ。家ごと転居。

### 伊丹空港四三個分

デンバー空港は、滑走路が五本あり、最終的には一五本まで増やすことができる土地をもっているという。ゆーに伊丹空港四三個分の広さである。広いということは、ひとをどのように変えるのだろうか。元々この地に住んでいたのは、ネイティブインディアン。

広野に水とエネルギーを注ぎこみ、道を作り、滑走路を作り、町にする。この国の本当の歴史は、自然のなかに埋もれ、アメリカという新しい国の歴史に塗りかえられている。アメリカほど自由と人種差別の激しい国

もない。

### 厳しいチェック

デンバー空港での搭乗手続きは、抜き取りの爆発物チェック検査対象になったため、全員の荷物がX線検査にかけられるなど厳しいものになった。通常なら一時間あまりゆとりがあるはずだったが、チェック対象になったため、手続きが終わったときには、出発まで三〇分弱しかなかった。

最後の買い物がつくりはできませんが、お店を見て回るくらいならとの小池ガイドの計らいに、集合時間を決めて解散。一〇数分の最後の自由時間。

### 空港も走るランランシズカ

集合時間になっても、一人行方しれず。みんながどうしたのだろうねと話している、その目の前を、カモシカのように走る抜けるランランシズカ。

「あ、いたいた」

「シズカさくん、ごっよ」

みんなの声も届かない。集合に遅れたと思っっているのか、わき目もふらずにひたすら空港内を跳ぶように走るランランシズカ。最後まで、元気に走る若いシズカをみんなニコニコしながら見ていた。

### 旅の終わり

九月一七日一四時四五分、成田到着。一〇日間で、すっかり疑似ファミリー化したグループが、それぞれの現実へと向かう。わずか一〇日間の旅、それは広いアメリカやカナダの一断面ではあるが、さまざまな凝縮された現実にてあった。

これまで、文字や映像を通して部分的に知っていた人や自然や制度の一部を、自分の五感を通してふれることで、僕は自分や自分が住んでいる自然と社会を再確認した。インドを含むアジア周辺の生活を見直した。それは、それぞれの風土と文化、ひとと他の命との共生のありようの再確認であった。

そして、日常の生活の中であっている人たちとの非日常的時空間の共有、初めて会う人たちとのコミュニケーション、それらが、新たな出会いと発見を生み、自分を取りもどすきっかけとなる。遊びをせんとや生まれけむ。

この体験を風化させないために、そして、追憶の加工がなされないうちに、スタディ・ツアーのレポート番外編として、この旅日誌を残す。

## ツアーメンバーの感想

旅は人にさまざまな経験をもたらし、その日常を見直す機会を与えてくれる。新しい出会い、発見、それは自己の内外に対して起きる。園芸療法スタディツアー番外編旅日誌最後の章は、参加者の一人ひとりが語る、旅の体験。

それぞれの感性とフィルターは、何を見、何を感じ取ったのだろう。

自然は大人にとっても子どもにとっても大きな玩具（吉川記子：ノリコサマ）

この度はご縁があつて米国スタディツアーに参加でき山根先生を始めみなさまに大変お世話になり深くお礼申し上げます。

先生方には研ぎすまされたお心で、ご案内いただき感動することばかりでした。

山根先生と腰原さんが京都駅で下車なさって、新大阪駅まで一五分と思いうれしくなっていたのもつかの間、新神戸〜京都駅間、落雷のため不通と知らされました。一時間以内には開通すると思いきや高をくくって待つておりましたが、運転再開の気配はなく「のぞみ」の車内で一時間停まっていたところで、在来線に乗換深夜の帰宅となりました。

「銀の鈴」には冒頭の「自然は大人にとっても……」の看板を立ち上げた頃から掲げ、訪れる方々をお迎えしていますし、暮らしも自然に！と心がけています。

園芸療法・作業療法を取り入れたガーデニングを通して草花が人間にくださる体・心・魂へのつながり、癒されることに気づきをいただいております。

みなさまは毎日臨床のお立場で患者様と接しておられ、私のようにつれづれに出向いて行って作業をする気楽さとは大差がおありでしょう。でも目的はいつでも同じであったと思います。

スケールの大きいアメリカ大陸に降りたつてびつくりすることばかりでした。見渡す限りの地平線の広がる大地、大円型のスプリングラー付きの農園、こだわらない開いた心（食文化や服装から普段のままを知りました）交渉するのが当然の国等でした。

まず、赤土の砂岩「神々の庭」でのしやぎようは微笑ましく、文明の利器を使って楽々と、4300メートルのロッキーマウンテンの頂上に立った私は、三六〇度視界のきく穏やかな夏山を觀ました。厳寒の冬に耐え、登山列車の線路脇に咲き誇る高山植物の花々に感動しました。特に子ども頃からなじみ深いりんどうの花は一層気高く清く咲いているように感じました。壮大なあのロッキーマウンテンの絶景をいつまでも心にやきつけておきたいものです。楽々と登って易々とロッキーマウンテンの魂はいただかないと悟りました。でも、今後不安や苦難に遭遇したら、ロッキーマウンテンの大自然にお願いして預かっていただくことに致しました。

次の日から予定どおり視察が始まり、園芸療法を取り入れた受刑者に対しての職業訓練の場、プエブロミニマム・センター。非営利で私立のリハビリ病院。患者が満足する様に多彩なクレーションチャンスを与えて回復を促すクレイグ病院。それに病院の凝った壁画、天井画、車いすの調整工場（職人さんが常時仕事場で器具を直している）。また身障者になった方のドライブの指導、援助等、日本ではこれ程に取り入れられていないサイバース部門を見学させていただきました。

閑静なたたずまいの普通の家のクアライフでは、人生の終末をより心豊かに心静かに過ごしていただけたる様にといろいろ工夫を凝らした癒しの場として、安らぎの場を提供していらつしやいました。長時間にわたりスライドで説明を伺い、私共も実際経験したことのない様な作業をして実感を深めました。何といつてもい

ちが明朗でいのち満点と想っている私共、健康な体で文句を言っているのは贅沢な思いと、しみじみ患者さんのおつらさをお察しいたしました。

デンバー植物園は多様な植え込みがされておりましたが、ささやかな「銀の鈴」の植え込みの品種がほぼ似かより親近感を味わいました。

パーティーや協会の会議にも参加させていただきました。人に酔うほどの大勢の立食パーティーでしたね。

とにかく意義深く日本の園芸療法が良いかたちで広がり伝わってゆくように微力ながら草の根運動のお手伝いのできたら良いなと感じています。

連日楽しく盛り上げてくださり、お心遣いも大変うれしく思いました。帰国の飛行機は窓側だったので機上からの景色を思いだしてみました。

振り返れば日本が見える！！のセリフじゃないですが、北極回りでフライトしており、海に出たりアメリカ大陸すれすれを北上、バンクーバーやアンカレッジの上空を飛んでいたと思われれます。峰だけ雪の連山に連山、真白き大陸が雲間からよく見えたものです。誰一人すんでいない大地から海に抜け、樺太から北海道へ近寄きました。高度が下がり、刻々と成田に向かって。

途中会津磐梯山が見え、曲線緩やかな九十九里浜、利根川や露が浦、それに緑の田んぼが見えたときは、乾いた砂ばく地帯のデンバーと違って、水の豊かさ、水を貯えた青々とした日本にほつとしたうれしさが湧きました。富士山も見えていたのです。

「明日から現実に戻ろう」と覚悟して家に帰りました。旅の後成長している草花に出会いました。作業をして世話をして酷暑の中、お花もがんばっているし、人もがんばっている昨今です。

デンバーコロラド、スプリングスで「こだわらない開いた心」を学んできましたので、これを糧に前にない

自分の現実を画りたいと思います。  
みなさまどうかこれを期に今後ともよろしくお願いいたします。

## 2001年 アメリカの旅 (石井忠彦：イツシー)

私にとって今回のアメリカの旅は前半が研修で、中がのんびりデンバーにステイし、後半はニューメキシコで友達とのネイティブ大地の旅という三部構成になっていた。前半はきつちり一日一施設という割で、しっかりプレゼンテーションされた研修先の対応、さすがビジネスライクのアメリカだと感心させられた。説明する人、する場所、用意された資料、さらに参加できるワークショップと管先生の通訳が理解を深めた。締め〆のQ&Aのミーティングは有効でした。それでは、まず前半の研修で訪れた施設やワークショップについての感想を書いてみました。

### 一 プエブロ・ミニムム・センター PMC

見通しのきくフェンスが日本での刑務所のイメージを変えてくれた明るい施設として映った。二〇六床の女性受刑者の更正施設即ち日本には存在しないアメリカでもモデル事業として取り組まれている医療刑務所である。PMCの理念で「最も拘束の少ない警備の体制で、専門的で、安全な人間味のある更正環境を提供しており、この中で園芸療法を取り入れた職業的訓練をとり入れている。」

### ★ PMCの園芸療法活動

HIRのデービッドが渡してくれた一枚のパンフレット「職業的園芸訓練プログラム」のなかで、デービッドは園芸のグレードを三段階に分けている。それぞれの段階をマスターすることによって修了証を与えられ、その第一号であるジュエーシーは約三年間で六〇〇〇時間のインターンシップを終えて今までは施設内の温室及びガーデンでのインストラクター的存在で活動している。その彼女はこの園芸トレーニングにたいする思いや効果について語ってくれた。

『HTプログラムは自分にとって癒しの効果があったし、園芸を自分の中に意識するようになり、自分の魂が植物を育ててきたように思える。そして、自分について最と深く考えるようになってきたし、将来は地域のなかにはいつていき、活動を展開し、自分の生きがいとしていきたいと思っている…』

### 二 クレイグ病院

この病院はコロラド州デンバーにあるリハビリテーション専門病院である。ここのカウンセラーであるケニールが言った言葉で「HTとかレクリエーションプログラムはカットされ始めているが当病院では重要であると認識している。どんなに保険会社がつてきてても、我々はキチツとした治療が最終的には一番適正で効果的、経済的なコストだと思っている…」

この病院の徹底した可能性の追求する姿は明確に訪れた人たちに通じ『こんな病院があったらいいな!』(日本文の資料)のキャッチコピーそのものであった!要約すると下記のようなのである。

①療法的レクリエーションプログラムはすべてのレクリエーションを可能にする勢いがある。

- ②すべてを可能にするための内部の施設、一例として車いす開発製造会社を自分の病院で持って、患者の細かい反応にも対応している。
- ③病院内のヒーリングアートは一五年前からファイアットさんを中心に始められており、絵やインテリアがとても気持ち良かった。
- ④スタッフの個人スペースも十分に取っており、野外での食事もできるガーデンもまたすばらしい。

★クレイグ病院での園芸療法活動

このHEプログラムはセラピュートイックレクリエーション部門に属している。HEプログラムを担当しているスージーさん他一名が中心になって約一〇人の専門家がチームを作り、屋内外やグリーンハウスで行っている。そのスージーが次ぎのように言っていたことまとめてみる。

- ①患者さんが中心になって庭を造っていく、そのためにいろいろのアイデアを出してくれるのが役にたつ。患者 とそのファミリー（子どもも含む）と一緒にガーデニングができる。
- ②HEのガーデニングはいろいろな場所にあった方がよい。それはいろいろな条件での自然、植物観察、違った作物 の収穫など幅のひろいガーデニングを経験できる。
- ③花の向こう側にコミュニティを意識しながら活動すること、それが人、社会、患者をどのような良好な関係を結ぶんでいくかを大事にしたから。

さらに、ここではコロラド大学健康科学センターのジュリアさんと協力して、身体障害があっても可能な農業をおこなっていくプロジェクトの説明を受けたことには驚いた。

三 クアライフ/Qualife

私はアメリカへ行く前からこのNPOとしてのこの施設に興味があった。行く前はもっと大きな規模の施設をイメージしていた。しかし、現実には一戸建てで庭付きの規模だ、すこし考えてみるとこの規模でもとてもすごいことだと思う。日本でのNPOのことを考えてみればすぐわかることだが。そして、この施設のなかでいろいろな機能がうまくプログラムされているのにすごく感心した。

資金や補助金を集めるのにもまた地域住民とのネットワークそれに専門家の人たちのこの施設への思いもすごく感じられた。私も日本でこんな施設を作ってみたいものだと一瞬思いがよぎった。さらに私と同じ職業：ランドスケープデザイナーのテリーさんの参加の仕方は非常に参考になった。テリーはここでの園芸療法のリーダーづくりに中心的役割を發揮していた。

芸術療法、音楽療法、ポプリづくりに参加できなにか心が和む経験をさせてもらった。この施設は癌や難病の人たちにとって“心のオアシス”的存在であり、生活支援のセンターとしてなにかヒントを得るものが多かった。

★クアライフ/Qualifeの園芸療法活動

このHEセラピーはデンバー植物園のインターンの協力をもとに誕生し、一九九九年に記念瞑想ガーデンが設計され約七〇%が出来上がっている。一画地規模の庭であるが滝、水の音、木陰、芝生広場、レイズベッドなど気持ちいい空間がつけられている。さらに温室、噴泉など整備されこれからいろいろプログラムが展開されるでしょう！

コミュニティの人たちやいろいろなタイプの支援者でつくられた【ヒーリングガーデン協議会】の関わり方

- や運営などについてのディレクターのナオミさんとの一問一答は勉強になった。下記は印象に残った言葉：
- ①まず実現するためには、どんな人とどんな資源がひつようなのか？
  - ②反対する人を自分のほうにまねきなさい！
  - ③どのグループとどのグループがうまくいくかを考えなさい！
  - ④何の目的で集められ、どういうことをしてもらいたいのかをはっきりしなさい！
  - ⑤大切な核になる人たちには初めから関わってもらいなさい！
  - ⑥患者さんがいろいろなことに関わっているということを具体的な事例を見せて人々のハートに訴えかけた。
  - ⑦内容のいろいろ違った組織を結びつけ、いろいろな共同作業をつなげていく。
  - ⑧大変な作業だと思わせないう、また苦勞しないような工夫をしてみたところが大変でした。
  - ⑨すでにあるプロジェクトにくっつけて少しづつ大きくしていった。

#### 四 アメリカ園芸療法協会・2001年ATA会議

『人と植物の関係を開拓する！』というテーマに私は一番まいてしまっていた。というのはもうかれこれ六年ぐらい前から私の頭のなかから離れなかったからである。このテーマをどのように展開していったらいいか全く解らなかつたからである。

#### ★ 日本の園芸療法：パネルディスカッション

パネリスト：ダイアン・レルフ／ボディル・アナヤカーリン・フレミング／山根寛／管由美子をパネラーとしておこなわれた。次のような意見が私には印象的であった。

- ①日本での統一としてのHTを語る場が欲しい！その一つとして九州大学の松尾先生の「人間植物関係学会」のこれから動きを見守りたい。
- ②国際的なスタンダードな認証システムが必要ではないか！
- ③広報活動が大事なのではまた高知の牧野富太郎の言葉は日本のHTの哲学を感じる。
- ④日本人のなかにすであつた人間と自然の関係を発掘していくなかで日本のHT誕生をめざしては！
- ⑤アメリカで学んだ人たちがもつと連携を取って積極的にいろいろな施設や団体に働きかけていったらどうか！
- ⑥園芸療法的活動するなかで何か気づいたことや変化をキチツと記録していくことが最終的にはH.T.の評価の目安になっていくのでは。
- ⑦評価については、その施設独自の評価があるので、それにしたがっては！

私はこのセッションに参加して、日本のHTが世界のなかでどうなのか？また世界のHTの位置づけについても少し理解が進んだような気がする。

最後に研修の仲間たちと別れ、さらに五日間デンバーに滞在し、デンバー植物園、モリソン園芸展示センターを二日間訪れた。特にモリソン園芸展示センターでの感想を述べてみたい。

#### 五 モリソン園芸展示センター

このガーデンは一口でいってとても素ばらしく機能的にデザインされている。このガーデンデザイナーは私も学生時代に教わったカリフォルニア大学のギャレット・エクボ教授だと解ってびっくりした。ASLAのユニ

バーサル・デザイン賞を受賞している。講義室、室内ガーデン、屋外の療法ガーデンなど非常に良くデザインされているなと思った。

このHTIプログラムを率いるHTMのレベッカ・ホラーさんで、それをサポートするボランティアの協力関係もすばらしいと思った。

私が訪れた時はレベッカ・ホラーさんは留守で助手のリンダさんが応対してくれているの資料を提供してくれた。そのとき居たツアーガイドの老夫婦にも感動した。ご主人は腎臓を患われていてそれでも自分のペースでガイドの仕事をされていた。

以上五つの研修地について、山根先生が言われていた“アメリカの光と影、ピンからキリまで…”という視点でみるように努力してみた。仲間と別れ五日間のデンバー滞在はアメリカから日本をみる、アメリカをもっと客観的にみる期間としては意味のある日々であった。その感想がノート一冊にもなってしまった。特にアメリカの消費文明にはほどほど嫌気がさした。

アメリカ人の芝生化する町づくりの執念には砂漠化とあの広大な面積のなかで、かろうじて自分たちの緑の環境をつくり、維持していくのには一番手っ取り早い素材と手法だとも解ったが、あの水の量と消費の量を思うとなんと言いだないものを感じる。ニューメキシコでは友と二人で回った先住民の大地の風景はあまりにも過酷でありながら我々日本人が日常で体験できない限りなく広く、さまざまな自然の現象を一望に眺められる風景には人間形成の不思議さと影響力を感じ得なかった！我々は自分の国の大地の歴史文化のなかで、もっと強くいろいろなことを考え進めていくことの必要性を感じた旅でもありました。

#### 米国コロラドツアー感想文（高橋 滋：シゲルもしくはオダマリシゲル）

大学で社会福祉（心身障害者福祉専攻）を学び、滋賀県大津市のびわこ学園と今の白浜学園で心身障害児者の生活支援の仕事について25年の歳月が経ちました。

6月下旬、突然園長から「高橋さんこれ行かん？」と米国ツアーのパンフを見せられました。まさに、一瞬絶句。青天の霹靂。呼吸が止まり、血液の逆流にも似た激震。冷静さを装いつつも「教日考えさせてください（内心、「イヤです、と絶叫」）」との言葉に「あ、そう。嫌ならいいわよ」と脅しが来て、その場で「行きませ」と心にもない返事で始まった今回のツアー。

私は花がとても好きです。アジサイとコスモスが一番。職場では主任ですが、園芸教室と園芸活動を担当しています。月1〜2回、宮崎市の植物園へ出掛けて園芸を勉強しています。だけど、どうして米国なのよ！なのです。

学生時代から、アメリカの社会福祉援助技術（ケースワークやソーシャルワーク論）にどうしても全幅の信頼を持っていなかった。ましてや、一部御用学者の日本への無批判の導入により、手法としての技術論のみが先走り現場で大きな混乱の時代がありました。

要するに、米国はあまり興味の対象ではなく、まして出張などでは行きたくもなかった。ホリデーとして、インドかアフリカに行ってみたい、というのが私の以前からの夢でした。ところが、今職場の若い人、ボランティアに来園する高校生たちに誰彼なく「英会話を勉強しなさい。是非一度、米国に行くべきだ」と強要している有様。本当に行つて良かった。心からそう思っている。47歳になつても人間は変わる、ということを少しばかり驚いている。自分はまた新しく変わりつつあることを実感している。

ロッキーの山々、すがしい空気、園芸療法にかかわっているスタッフの方々。その歴史と人生（人となり）に正面から対峙できたことこそ私の大きな支えとなり、財産となっている。今も山根先生、菅先生はじめ同行した皆さんと訪問した1つひとつの場所や出来事を熱く鮮明に刻している。

学ぶということは、実は自身が変わるといってもあるといえる。四季が巡ると同じように人の生と死も宇宙のスペクトルの中で美しくドラマを創って繰り返されるのであろう。様々な障害を負っている利用者と共に日々植物や花に向かつて「生きる」ということの事実を大切に看つめていきたい。

今、園庭に6つのレイズベツトを設計して、設置作業を開始したところである。来年3月には、菅先生をお迎えして日向市で研修会を開けるように準備しています。

本当に沢山の出逢いをとても感謝しています。

宮崎県でも今、イセエビのシーズンです。スーパーの店頭では活きたイセエビが売られています。それがどうしてもロボスターの子どもに見えて仕方ありません。山根先生、私が京都に行く機会があったら是非「かに道楽」でロボスターをもう一度バドワイザーで乾杯しながらご馳走してください。

高橋はとても陽気に元気になりました。フレンドリーになりました。本当にお世話になりました。ありがとうございます。

\*ロボスターとバドワイザー、いいですね。ただ、「かに道楽」の本店は大阪道頓堀、しかも「かに道楽」にはバドをおいていない。この問題は些細なことか、重大なことか。：：ジージャマのつぶやき

デンバーミステリーツアーに参加して（望月晃二：モッチー）

エピソード

ことの始まりは、ある職能団体のニューズレター、仮に日本作業療法士協会としておこう、に一年前に載った参加者募集のお知らせに目を通したことからだった。機関誌はじっくりとは読まないものの、頻回に送られてくるにもかかわらずニューズレターは隔々まで読むことにしていたための悲劇（いや、良い知らせ）だった。次のチャンスは逃さないぞと思いついたために、山根&管という組み合わせが何をこの世に生み出すかに気づかずとうっかりと今年のツアーに早々と申し込んでしまったのである。もともとこのツアー、二倍楽しめるから料金もなかなかなのだろうか。しかもツアー日程が決まる前から仕事の調整をしようという私自身のおまけ付きではあった。

第一章 ノースウエスト航空での異変の兆し

四ヶ月前にスウェーデン・デンマークの高齢者福祉視察研修のために出かけた成田空港第一ターミナルに戻ってきた。前回はエールフランスであるために、ノースウエストは久しぶりだ。だがエールフランスは帰国便に荷物が乗っていないという失態をやらしかしてくれたし、機内で買ったサン格拉斯 (Botanic Garden) でつけていたものです、皆さん) は傷だらけだった。今まで飛行機が飛ばずに日本に帰って来れなかったことはあったが、荷物のトラブルは初めてだった。しかし自宅まで荷物を持たずに帰れたし、後始末もしっかりしていたからまあいいかという気分になっていた。この時点で二度あることは三度あるという格言を忘れていた……。滅多に行かないグループツアーという気楽さが油断させたのかもしれない。それでも自分ではめずらしく、機内

持ち込みの荷物に着替えの一部を入れておくという備えは無意識にしていたのだった。この心構えも結果として、十分ではなかったのだが。

成田空港でチェックインしようとする、乗客の数に比べてやけに時間がかかっている。こんなことは以前もあった。出発時間が大幅に遅れたときだ。その上、どうも一部の乗客については座席希望を無視して事前に発券しておいたチケットを渡している。おいおい、それならなぜこんなに手間取っているんだよ。ここ数年、ノースウエストの機内映画がつまらなくなっていることを思いだしてしまった。ん、こう書いていてこのことも予定されていたことだったのかと今考えついでしまった。しかし出発はめずらしく定時であった。でも両側が大柄のUSA市民に挟まれての長旅となった。ツアー一行よりも一日早くにミネアポリスに行って、ウィンドウショッピングを楽しもうという目的があつたからまだ許せる気分だった。

## 第二章 Mall of Americanの変化

ミネアポリスでのアメリカ入国は、いつになく審査でしつこく質問された。ここから空港での備え付けの電話を使ってホテルのシャトルバスを呼んだ。

USAの大きさを誇る巨大ショッピングセンター（四つのデパートと屋内遊園地をその中に持つ回廊式のショッピングセンター）で、到着日の午後から空港待ち合わせとなる翌日の正午過ぎまでたつぷりと歩いた。数年前に来たときに比べて、人出が増え、黒人の数も多い。本当に景気が良くなったのかもしれない。でも楽しそうにしている白人が少くないということが気になった。ここでは今も研究室で飼っている犬を購入した。実はこのあと続くことになるミステリーツアーでスーツケースが戻らなかったので、唯一最も心配していた荷物であった。

## 第三章 ミネアポリス国際空港にて

さて、いよいよツアー一行との待ち合わせだ。山根氏、腰原さんを除いて初めて会うことになる。団体旅行の楽しさはそのメンバー次第になるから大事なところだ。あ、管さんは研修会のために遠くから見かけたなあ。ホテルから空港にはホテルの送迎バスを利用して、余裕をもって二時間前に着いた。日本からの飛行機はその二時間前に着いているはずだ。ところが、デンバー行きの一時間前になってゲートが変わった。こんなときはたいてい良くないことが起こるものだ。グループはその内に、山根氏（以下、YAMANIと略す）を先頭に静かに現れた。ほう、皆慣れた感じですね。長時間のフライトと待ち時間の長さに疲れていたのだろうか。自己紹介もしないまま、定時よりも一時間一五分遅れて飛行機に乗り込む。さあ行くぞと思つたのもつかの間、デンバー上空が嵐のために途中まで行って引き返すことになった。わずか一時間ほどのフライトなのに随分時間をかけて、結局再び、ミネアポリス空港の元の待合室に戻った。こういう経験はなかなかできるものではない。ツアー一行は早くも、YAMANI&管という強力コンビの潜在力を知ることになる。アメリカのnatural powerが東の国から来たhealerに試練を与えているのである。この事実をメンバーは翌日になって知ることになる。

だがとりあえずは、今日のホテルだ。飛行機の再予約とホテルの手続きのために、空港から少し離れたところにあるHoliday Innに着いたのは深夜一時であった。空港で気づいたことは、手続きを待つ間に一人の黒人青年が列に割り込んだときである。そのことに黒人の空港職員が気づいて注意をした。こんなときたいいやむやみなることを以前に何回も見ているので、そのままになるのだろうかと思つて見ていたら、やはりそうだった。マナーを守るということは周囲や社会に対する文化的に大人としての積極的なアピールということ

を確認できたシーンだった。日本では翻訳者あるいは留学経験者から、欧米が自己主張を重視する社会であるという一面的に教え込まれている。しかしそのことは他人を尊重するということとは必ずしも一致しない。周囲とは関係なく自分中心に自分の意見を押し通すという行動が、自己主張の裏側には存在する。周囲や社会への配慮のない意見や自己主張というものはそれこそ日本でも多く見聞できる。自己主張行動は気づきがあつて初めて機能するものだと思う。いまだ衰えることを知らない日本でのSSTブームの陰に私自身が感じる危うさはこんなところからもきているのだなと感じた。

それによりやく自分たちの番になったときに他の乗客には進んで渡していたお泊まりセットを、空港職員が、……たまたま我々には渡さなかった。よくあるたまたまた。ここでは自分を discount せずに自己主張することが必要だ。そう自己主張には他者からの discount にNOと言う意味もあるのだ。無事に自己主張して全員分のお泊まりセットをもらいバスに乗った。そして、翌朝、六ドル五〇セントの朝食を食べて空港に向かった。

#### 第四章 コロド・スプリングスにて

さて物語はここから始まる。空港に降りたつたのに、荷物が着いていないのである。いよいよ始まった。ガイド氏、旅行社及び菅さんが何度も交渉するがなかなか埒があかない。人間窮地に陥ると感が湧えてくる。帰国するまで出てこないんじゃないのかなあと内心思っていたんですよ。

Pikes Peaks に登ったときは、何人か高山病にやられたが私もその一人です。頭痛、だるさがでて夜寝るまで続きました。そういう四〇〇〇mの高所でスタスタと歩き回っては写真を撮る YANNI はふつうじゃありません、多分。

でも限りなく強い日射しの中で、高くそびえる岩やその中に現れてくる木々、草花を見ると、自然やその背景にある spirit を感じざるをえない。この感覚を日本の自然や wet な社会の中で言葉にすることはむりだ。

#### 第五章 いよいよメンバー

受刑者の更生施設での園芸療法の実際を視察するために、プエブロ・ミニマム・センターとサンカールロス更生施設に行った。ここで一番印象的だったのは、各スタッフの部屋であった。案内してくれた園芸療法士の David の部屋は、書類が山積みになっているわけでもなく、木造のここなら落ちついて対象者のことや therapy のことを考えられるなと思える部屋だった。こんな環境で仕事をしたい。

更生施設でのプログラムには、かなり心理社会的なアプローチが反映されていた。アメリカの病院での治療が外来や自助グループ、個人の財布頼みになっているのに比べて、まるで日本の中の典型的な地域医療を標榜する病院での治療プログラムを見ている感じだった。レベルとしてはとくに差がない。なかでも薬物依存症のための中間施設として知られているミネソタ州の Hazelden のプログラムが実践されていることには驚いた。どうやら自助グループを中心とした活動と施設を中心としたリハビリプログラムでは、後者がアメリカの社会では選択されてきたようだ。八年前にその施設を見学したときに考えたことがいま、目の前で実現されていた。

ツアー四日目に、脊髄損傷者のリハでは全米でかなり上位にランクされるクレイグ病院を訪れた。以前から知っていて驚きはしなかったのだが、日本で作業療法と呼ばれているもののかかなりの部分がレクリエーション療法士の手で実践されていた。私自身八年前から何回か警告してきたのだが、今現在でも、日本の作業療法士たちの多くは自らの地位の安泰を疑っていない。手工芸をおこなうことに意義を主張しても、社会的な意味を見いだすことはできない。日本の医療がめざしているアメリカ型のモデルの行き着く先が生活からの作業療法の撤退だ。海外で学ぶ作業療法士は、その社会の文化を学び、伝えて欲しい。Universalなものなどありはしな

ということ伝えて欲しい。目新しい評価法や言葉を学ぶことが作業療法の学習だろうか。留学することや英会話が堪能なことが作業療法士としての優秀さなのだろうか。一七〇〇名の作業療法士を引っ張って行くには貧しい発想だ。日本ではいつになったら作業療法の哲学が、肩書きではなく、洞察力と先見性で論じられる時代が来るのだろうか。

この日の夜中にやっと私の荷物も届いた。

#### 第六章 クアライフにて

アメリカでの園芸療法の実際は、資格制度が広まる前にすでに医療の現場からは削られ始めている。そうなれば必然的に園芸療法は、民間療法の中で生きることになるのだろう。理論的に考える、方法や効果を包括的に検討する、社会の中でその意義を考えていくということは軽視されていく。園芸療法の行く先にあるもの一つが曼陀羅であると聞いて、直感的にこれは危ないと感じた。だれでも園芸療法ができるとなれば利害を重視する者、名声を求める者、新興宗教に利用する者がでてくる。園芸と園芸療法の違いは明確にされているのだろうか。音楽療法や動物介在療法もそうだけれど、園芸、音楽、動物とのふれあいには効果も意味もないのだろうか。だから敢えて療法と造園家、音楽家、動物学者は名付けるのだろうか。それとも区別されないままに療法といっているのだろうか。それでは対象者はたまったものではない。日本では、世の中はしばらく前から心理学ブームで、誰でもカウンセラーと名乗ることができる。その約一〇年前に言われていた八百万の神々の時代は新興宗教と自己啓発セミナーの大流行の時代だった。誰もが癒されたがり、今は誰もが癒したがっている。社会病理は進んでいる。

ツアー六日目には、*Botanic Garden*での園芸療法協会の大会に参加した（つもりだった）。私はそこをかなり

省略して、タクシーで五分のショッピングセンターへ出かけた。そこには平日なのに子ども連れの家族がかなり来ており、海外旅行においてはめずらしく多くの子どもたちを見ることができた。このツアーでは他の場面でも子どもをよく見かけることができたと思う。それだけ日本人の海外旅行の行動様式からは外れていたのだろう。子どもたちは小学生低学年くらいまでは日本人と同じに見えた。その親たちの行動も。この観察は収穫だった。

#### メンバー at night

夜のメインストリートの徘徊は楽しい。特にウィンドウショッピングを趣味としている私にとっては歩くことがおもしろい。でもスターバックスで料金をぼられる（二〇セント！）とは思ってもみななかった。アメリカは奥が深い。

#### 七月一五日東京駅にて

飛ばないはずの飛行機が飛んで、スケジュールどおりに日本に帰ってきた。だがまだ終わってはいなかった。そう皆さん、東京駅のエスカレーターでの将棋倒し事件を覚えていますか。隣のエスカレーターで上の方からおばちゃんが倒れてきたことです。あのおばちゃんが我々の先を歩いていたら、こちらが将棋倒しだったかもしれません。でもどこまでも我々は守られていました。

待望のアメリカツアーから、はや三週間が過ぎようとしています。いつもの忙しさに「あのコロラドの一週間は夢だったのかしら」と錯覚に陥りそうになりますが、乾燥した青い空をバックに神々の庭の巨大な赤岩の上にも座って子どものように無邪気な笑顔で写真に収まっている山根先生と菅先生を見ると、あの一週間がまぎれもない現実であったことを確認することができます。そして、先生たちを含めた実にユニークな九人の有意義で楽しい珍道中が思い出されます。非日常的な体験がいかに鮮烈であるかを思い知らされています。

山根先生よりいただいたこの宿題は何を書いたらいいのやらと思いついてはいるうちにいつもの日常生活はどんどんと過ぎてしまいました。よく考えるとこれは恐ろしいことです。たくさんの写真、びっしりメモしたノート、心に強く響いたこと、浮かんだアイデア……。とっても大切な宝物ですが、静かで強暴な『日常』にいつものまにか食い荒らされて無残な姿になってしまふ危険にさらされています。今ここで、きちんと整理して体験を知的なものに置き換えておくこと。この宿題は山根先生の愛であると今思っています。

すべての瞬間が *attractive* ですが、特に印象的だったことや感じたことを書いてみようと思います。一番 *impact* があつたのは、クアライフのスタッフの方々の情熱と行動力です。もちろん「たとえ病気であつても(障害があつても)それは決してその人自身の欠損ではない。」という考えのもとに、全人的な働きかけを行っているという基本ラインは私達リハビリテーションに関わる職種と同じです。しかし思いがあつてもそれが実現しなければ絵に描いた餅です。どうやって現実と折り合い、思いを形にしていけばいいのか。毎日の業務に忙殺され、病院のしがらみに抱かれながらもなんとか活路を見いだそうと思いついています。そんな私は頭をハンマーで殴られたような衝撃を受けました。特に、反対派の医師を会議に招き、最終的にはその医師を味方に

つけてしまったくだりは感動ものでした。感情的にならず、相手の意見を聞き、誤解があればとける様に具体例をきちんと報告していく。その上で信念を持ってこちらの意見を主張していく。当たり前のことではありませんがこれがなんと難しいことか。具体的な例を挙げて説明してくださったので大変な臨場感があり、情熱がびんびんと伝わってきました。彼女が強調された *intension* という単語を大切に日本に持ちかえり辞書で調べてみました。

*intense* / *adj.* / *having feelings or opinions which are (too) strong, serious, etc.*

「思いのあるところにエネルギーが流れて行く」という言葉はまさに *intension* のなせる技なのだと思います。分けていただいた熱い情熱と知恵を猛暑の名古屋でも根をおろすことができるようこれから勝負です。

話は変わりますが、今回のツアーで得た新鮮な概念は「ボランティア」です。制度や文化の違いはあるのですが、どの視察地でもボランティアが活躍していたのには驚きました。特に園芸は作業内容も幅広く、力の必要なものも多々あります。自分の許容範囲を考えると手を広げられる範囲はおのずと決まってくると思います。「みんな忙しいのだから人に迷惑をかけてはいけない」という考えが可能性をせばめていることに気づきました。それでも尻ごみしてしまう弱気な私を励ましてくれたのが「みんな協力したがっている」という *HTR* の言葉です。日々の臨床の中で多くの患者さんたちは「ちよつと手伝ってくださいか」と声をかけると予想以上に集まってくれます。「役に立つ」「貢献する」という行為は人の有る尊厳や尊厳に関わるからではないでしょうか。そして、やろうとしていることの意味を知ってもらおうよい機会です。以後の活動にも関心を持ってもらえます。日本で病院のボランティアはまだメジャーではないのかもしれませんが、東大病院でのボランティアの取組みを聞いたことがあります。まず初級コースとして身近なところから始めてみようかと思っています。もう少し気候がよくなったら、暇そうな(?)患者さん、*DNIC* や *DC* のメンバーさん、心優しい職員さん

等に広報してお互いがボランティアに慣れていけたらいいなと思っています。中級コースは地域の人たち、職中の（？）園芸療法士の人たち、実習生の人たちと広がっていったら素晴らしいとひとりほくそえんでいます。ただ、この密かな計画に欠かせないのは前述の intension なのでしょうね。

ここまで休み休み書いていたら、山根先生から素適な写真付きの暑中見舞い兼感想文の督促状が届きました。先生、すみません。急いで送りますのでご容赦ください。皆さんの感想文付きツアー日誌を楽しみにして名古屋の酷暑を耐えていこうと思います。最高に楽しい一週間をありがとうございました。是非また一緒にできますことをお祈りしています。

P. S. ツアーから帰った週に病院の畑で大きな西瓜が収穫でき患者さんと

食べました。包丁を入れたときの歓声とみずみずしい甘さで旅の

疲れも吹っ飛びました。

### 作業療法と園芸療法 米国視察研修で思うこと (腰原菊恵：キウチヤン)

〈研修に参加するまで〉

ムシムシし始めた六月のある日、いつものように山根先生とお昼ご飯を食べようと外に出ると、「世界がくるくる回っている・・・」と先生が言いながらふらふらし始めた。忙しい先生のことなので疲れが出たのだろうと、ご飯に行くのをやめてすぐに研究室に戻り、しばらく横になって休んで様子を見ることにした。し

かし、夕方になっても先生の目眩は治まらず、結局車いすに乗って京大病院の救急に駆け込むこととなった。そこでCTをとり、点滴をしてもらってしばらくは自宅療養をすることになり、私はいろいろなところへ仕事の断りの電話を入れることになった。立て続けに仕事が入っている先生の身体言語であったのだろうが(確か去年も園芸療法ツアーの前にこんなことがあったけど・・・)、倒れたことを聞いた菅さんが私のところに泣きそうな声で電話してきた。具合はどうなの？私が働かせすぎたからなあ？園芸療法のツアーもやめにした方がいいかなあ？などと言いながら、やっぱりアメリカに行った方が先生の息抜きになるし、心配だから腰原さんもついていって・・・と、この時点で私の二度目のアメリカの園芸療法研修の参加が決まった。

なんだか少し騙されたような気分はあったものの、昨年参加して、アメリカの広大な自然を見て感激したのと、本当にすてきな仲間と一緒に過ごすことができたので、今回はどんな自然に出会えるのだろう、どんな人たちと一緒に旅をすることができのだろうか、どんなアメリカの現状をみることができのだろうかという期待もあり、どこか現実感が薄れる時間が過ぎせることもうれしくて、当日を迎えることとなった。

〈参加者の人たちと出会い〉

今回のツアーで寝食を共にする仲間と成田とミネアポリスで顔合わせをし、最初の頃はお互いにどんな人たちなのだろうと思っていたが、ミネアポリスからデンバー行きに乗り、ミネアポリスに再び戻ってきてしまった時のみんなの様子に感心してしまった。戻ってきたこと自体は、なんだかドラマの一場面の様な気がして、不思議な気分であったが、メンバーのどの人たちもあわてる様子もいなかった。いつも自然を相手にしている人たちだからだろうか、この事態に誰もいらだたず、反対に楽しんでいるような気がして妙に感心してしまった。このアクシデントでどこか一体感のようなものが芽生え始めた気がし、自然を相手にすると

いう心得をこの事件で体験したような気もした。

それにしても、アメリカの空港会社の人たちはどんなトラブルが起きようと、お客がいようと時間になると当然のように帰っていく姿を見て、半分感心し、おおらかな国だなあとあらためて感じた。

〈プエブロ・ミニマム・センターを見学して〉

女性受刑者の更正施設ということで、本来なら簡単に入らせてもらえない場所であり、アメリカでも数少ない施設であり、日本ではこのような施設はないこともあって、本当に貴重な体験をすることができたと思う。私たちが園芸療法視察ツアーとしていくことで、その場で園芸療法をしている人たちに光が当たるといった外部の人に認められることで内部の見方が変わっていくことは、日本もアメリカも同じなのだと感じた。

実際の園芸活動の場を見せたらうと、本当にしっかりと植物の手入れが行き届き、さまざまな種類の花や野菜が育てられていた。実習生は、かなりしっかりと実習を積んでいることが伺え、実際にもかなりハードな内容の訓練だということであつたが、ここでしていることが受刑者にとって自信がつくことになるというのには伝わってきた。仕事に就けるようになるということはとても大切なことであると思うが、それ以上に植物が実習生に与えている影響は大きく、園芸活動がうまく活かされていると感じた。また、ここにいる人たちは、軽い刑の人たちとのことであつたが、本当に開放的な雰囲気、園芸活動している人たちは、黄色のTシャツに緑の綿パンで笑顔を時々見せながら一瞬自分が更正施設にきていることを忘れてしまうような気持ちにさせられた。

隣接していたサン・カールス更正施設は、発達障害や精神障害のある人たちの特殊教育更正施設であり、ここに入っている人たちはふつうの刑務所にいるといじめられるためここに入所しているとのこと、精神的な

治療を受けつつ、刑期をまっとうしているということ、日本でも同じ試みがされる必要性を感じた。特に今の日本では精神障害者に対する刑事責任が問われている時期でもあるし、アメリカのよい部分として取り入れてみる必要があるかと感じた。また、この施設では、日本ではあまり聞かれない怒りのコントロールをするためのグループがおこなわれていることが聞かれたが、日本での最近の事件などをみていると今後日本でも同じような対応をしていくことが必要になってくるのかもしれないと思われた。また、女性更正施設同様、園芸活動を取り入れているとのことであつたが、こちらの施設の対象になっている人は、生活支援が中心ということで、園芸活動を授産的な活動として取り入れるよりはもう少し治療的な要素が強く用いられている様な印象を受けた。

〈クレイグ病院を見学して〉

この病院を見学し一番に感じたことは、施設内容が充実していることと、ここで働いている人たちにも余裕が感じられたことである。それもすべて一日の入院費を聞いたら納得できたような気がした。そのような状態であるから、本来ならカットされやすいレクリエーション療法や園芸療法がカットされずにおこなわれ、園芸活動もさまざまな場を活かしながらおこなわれているのを感じた。ここでもさまざまな職種が連携しながら治療に当たっており、以前はなかなか専門職種間が連携できていなかったということも聞いたときは、患者さんを中心に考えることで連携して行きやすくなるということはどこでも共通することだし、忘れてはならないことだと感じた。保険のこともあり、入院期間が短いとされているアメリカで、その平均入院期間の二倍をかけて治療をし、お金のある人にとっては本当に優良な病院であるだろうが、アメリカのお金のない人たちは一体どんな治療を受けることができるのだろうか、今回もこの点が気になった。

ここでおこなわれている作業療法は、作業療法士が患者さんを一日五〜七名みているということで、作業療法の経済面をかなり言われる（少しでも多く稼ぎなさいと言われる）日本ではこのような病院はほとんどないと思われる、うらやましく感じた。実際には、作業療法士は園芸療法士と連携して園芸活動をしたり、車いすや自助具を患者さんに合わせて作ったり、車に乗れるように訓練したり、実際に家庭に訪問したりと生活に密着した内容を行っているとのことであり、話を聞いている限りではしている内容に関しては日本との違いをあまり感じなかった（もちろんプログラムはかなり余裕があるのだろうと思われたが）。ただ、日本よりも他職種と組んで同じプログラムをしていることが多いには思われた。実際に作業療法をしている場をみれなかったのが残念であるが、作業療法室が理学療法室と同じフロアにあり、私服で治療をしており、患者さんも一緒に食事がとれるようになっていっているのは患者さんと治療者が身近な感じがした。

〈クアライフを見学して〉

どこが訪問先なのかわからないぐらい周囲にある家にとけ込んでいる外観が、まずはとても印象的であった。近所の家に遊びに来たというような家庭的な雰囲気と、迎えてくれた人たちの暖かさを感じて、とてもリラックスして過ごすことができた。ここでは毎日勤務しているのは助成金担当の人だけということで、運営資金を公的な補助金に頼りがちな日本とは違って、積極的に働きかけていくアメリカの強さのようなものを感じた。このように支払いができるひとでもできないひと、人種も関係なく、訪問した人は受け入れて対応し、生活の支援をしていくという施設が少しずつ増えているとのことであったが、低所得者の医療的なサポートもしているとのこと、この果たしている役割の大きき感じた。ここでは難病や癌の末期の人たちが対象であったが、日本には生活の場にそのような人たちが集う場合は当事者や、当事者の近親者が作っていることが多い

に思われ、クアライフのように専門職の人たちが集まって作っているのは感心した。地域と密着して運営しながら、何かをしなくてはならないという制限もなく、ひとが集える場を作るということは、やる気があれば誰でも作れると言ったスタッフの言葉には重みと自信を感じた。

ここでおこなわれていた園芸に関しては、アメリカの日常生活に密着した形で、ボランティアの人たちにも支えられて運営されていたように思われ、アメリカは本当にどこでもうまくボランティアがうまく活躍しており、ボランティアを通してさらにうまく地域と密着しているような気がした。他の音楽療法や芸術療法に関しては、言語的に皆と関わるときと非言語的に関わる時がうまく活かされながら、その対象者の生活を支える（特に精神的に）という姿勢は感心したが、どのような時に、どのようにおこなわれているのかで参加する人に影響してくるものがかかなり異なってくると思われた。

〈園芸療法の会議に参加して〉

アメリカにきて今回も思ったことであるが、日本の園芸療法はアメリカの現状よりもそれほど遅れていないということである。教育のシステムはアメリカの方が充実しているが、園芸療法での評価や、他職種からの評価も含めて日本と大きな差はないと思われた。日本で園芸療法をしている人たちがそのことを頭に入れ、「アメリカはよかった。日本はだめだ」と考えるのではなく、自分たちで園芸療法を宣伝し、内容を濃いものにするために学び合い、自分たちで園芸療法を作っていく姿勢を常に持っていることが必要なのだと感じた。日本の人は、外国の方がすごいことをしていると感じがちであるが、外国の見習える部分は日本の文化に合わせて吸収し、自分たちのしていることを自分たちでも認めていく姿勢が必要なのだと思う。

## 〈園芸療法について〉

今回見学した施設は、アメリカでもまだめずらしく数少ない施設であると思うが、そのような施設で園芸活動がうまく活かされておこなわれるということは、園芸活動がいかにアメリカの生活に密着しているかということを示していると思われる。今回見学した施設では、医学的な視点から園芸に関わることよりも、生活に密着させながら園芸活動の特徴を活かして利用しているように思われ、前回の視察と異なった視点からみることができたと思う。今回のように、生活に密着したかたちで園芸活動を利用する場合は特に評価を求められることはないと思うが、「療法」といい治療的に関わっているというのであればやはり評価をしっかりとしていくことの必要性を感じた。その点では、日本に新しくできた園芸療法の学校は医学的な視点からも学べる授業内容であるということで、日本の気候や文化を体験しながら学び、日本という環境に合う園芸活動が提供でき、評価もしっかりとできる園芸療法士が多く誕生することを期待している。

## 〈作業療法について〉

今回見学した施設のうち一施設のみ作業療法士がいて作業療法という名称でおこなわれていたが、この施設においても作業療法的視点から活動が利用されていたと感じられた。活動を利用するという非言語的な関わりが利用される場合と、生活支援という視点から関わりがされている部分は作業療法的関わりが十分に活かされるように思われる。

ただ、今回見学した施設はアメリカでも特殊な施設と思われ、あの施設の作業療法と日本の作業療法を比較することは難しいのではないかと感じた。

## 〈アメリカの大きさについて〉

今回もアメリカの大きさの基準が日本と違うことを本当に感じた。もちろんバスの中から見える広々とした景色には一番感動したが、みんなで食べたステーキや、決して忘れることのできない巨大なスフレには驚き、私の予想を遙かに超えていた。日本のような味の細やかさはないと思うが、量という点では十分であった。アメリカでは、「質より量」という印象を受けたが、それが医療や福祉の場にはみられなかったことに安心した。

## 〈最後に〉

今回のメンバーは作業療法士が多かったが、職種を越えてメンバーの人たちとは連帯感のようなものを感じ、本当に楽しく有意義な八日間を過ごすことができた。八日間も行動を共にしていくと、それぞれの個性が分かってくるのと同時に、自分自身も気兼ねすることもなく自然に行動できるようになることを今回も感じた。日本を離れるとよりグループの凝集性が高まるのが早いのか、園芸をキーワードに集まる人たちの人柄のせいなのか、その両方なのか、一回目も二回目も同じ感想である。

新しい人との出会いのエネルギーと、アメリカの広大な自然がエネルギーをわけてくれたような気がし、日本での活力となることができた。個性豊かな仲間と広大なアメリカの自然に感謝の気持ちでいっぱいである。

おまけ：行くまでは大変だった山根先生も、アメリカから帰ってきてからはすっかりと元気で過ごしている。倒れたのは、やっぱりアメリカに行って日本の仕事を忘れたという身体言語だったのかなあ。



園芸療法旅日誌2001ー  
作業療法と園芸療法研修ツアー番外編

2002年1月 初版発行

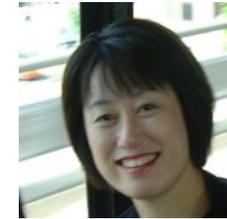
著者 ヤマニー（山根 寛）

発行所 京都市伏見区桃山町養斉1-1-501

印刷 Yamane print



キクちゃん



マドンナアツコ



ユミコ



オダマリツヨシ



ノリコサマ



ランランシズカ



イッシー



モッチー



ヤマニーとユミコ